

聖徒の道

2
1995



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1995年2月号



表紙——アルゼンチン、ブエノスアイレスのセミナーの教師は、末日聖徒の青少年を教えながら、70年近く前の祈りに対して与えられた祝福を味わっている。コリーナ・カスコ姉妹（写真左）もそのひとりである。（本誌「アルゼンチンに広がる福音の波」p.10参照。写真撮影／表紙——ラリー・A・ヒラー。裏表紙——F P Gインターナショナル）

こどものページ——ドイツのヤスミン・ドルナ。フライベルク神でんの庭で。（写真撮影／ベギー・イエリングハウゼン）

一般

大管長会メッセージ——手と心 第二副管長トーマス・S・モンソン	2
私はジョシーを忘れない ブライアン・M・ウェイト	8
親たちよ、あきらめてはいけない F・メルピン・ハモンド	16
垂訓中の垂訓 ダネル・W・バックマン	26
神の独り子の生き写し R・バル・ジョンソン	34
「食料が得られますように」 ワナ・リディア・カムボス・モリーナ	40
我が家の新約聖書テープ キャロル・ガーフィールド・シーグミラー	46

青少年

アルゼンチンに広がる福音の波 ラリー・A・ヒラー	10
若人の広場	20
証の力 ヒラリー・ハント	24
モルモンメッセージ——神を仰ぎ見て生きよ	33
三部合唱 エイドリアン・ゴスティック	42

定期特別記事

読者からの便り	1
家庭訪問メッセージ——「主のごとくに」	25

こども

モルモン経物語——王せいとうと自ゆうとう	2
小さなお友だちへ——V・ダラス・メリル長老	4
ちいさなみんなのために——ありがとうゲーム レベッカ・M・テイラー	6
おもちゃばこ	8
たんけん——やぎの毛で織った布とどろのれんが ビビアン・ポールセン	10
分かち合いの時間——わたしはしんこうかじょうをしんじます カレン・ロフグリーン	12
何よりすばらしいおくり物 グレッチェン・A・ハーシュ作	14

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：ハワード・W・ハンター、ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ボイド・K・バックナー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド
編集長：レックス・D・ピネガー、ジョー・J・クリステンセン

顧問：ウィリアム・R・ブラッドフォード、スペンサー・J・コンディー、ジョン・H・グローバーク

教科課程管理部責任者

実務部長：ロナルド・L・ナイトン
企画・編集ディレクター：ブライアン・K・ケリー
グラフィックスディレクター：アラン・R・ロイボーク
機関誌グラフィックスディレクター：M・M・カワサキ

国際機関誌

編集主幹：マービン・K・ガードナー

編集主幹補佐：R・バル・ジョンソン

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

編集補佐/こどものページ：ティエーン・

ウオーカー
工程管理：メアリーアン・マーティンテール
アートディレクター：スコット・バン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック

制作：レジナルド・J・クリステンセン、ジェニファー・ダットワイラー、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー

予約購読スタッフ
購読管理ディレクター：B・レックス・ハリス
配送部長：クリス・クリステンセン

マーケティング部長：ジョイス・ハンセン、ケント・H・ソレンセン

聖徒の道 1995年2月号第39巻第2号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 リック/クロスロード
定価 年間予約/海外予約2,400円(送料共)
半年予約1,200円(送料共)
普通号/大会号200円

Copyright © 1995 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1993年10月 翻訳承認—1993年10月 原題—International Magazines February 1995. Japanese. 95982300
●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。
●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資料管理部配送センター ☎044-811-0417

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seito No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

唯一のつながり

これまでの人生には、教会にあまり活発でない時期がありました。安息日にまずしたいことと言えば、出歩くことか、ビーチパーティーを開くことでした。当時、教会とイエス・キリストの福音との唯一のつながりと言えば、母が毎月持って来てくれた「タンブリ」(フィリピンの英語版)でした。この機関誌は内容が豊かで、どこをめぐっても霊的なメッセージと証、あるいはすばらしい物語が盛り込まれています。私はこの本を読むのが大好きでした。大管長会や世界じゅうの兄弟姉妹の証を通じて霊的に高められたからです。どの記事を読んでも、天父と教会を身近に感じる事ができました。

こうして「タンブリ」は、私が教会に戻るきっかけとなりました。これからもこの機関誌への関心が薄れることは決してないでしょう。現在私は教会に活発に集い、すべての活動に参加しています。そして今も、「タンブリ」が届く日を毎月楽しみにしています。

フィリピン、イロイロステーク部
イロイロシティーワード部
ソニア・P・アンチケニア

アフリカにみたまをもたらず記事

教会のこの機関誌にとっても感謝しています。私たちはフランス出身の教会員で、アフリカの赤道近くに住んでいます。(ここにはまだ教会が組織されていません) 祈りと聖典の勉強、そして毎月発行される「レトワール」(フランス語版。「星」の意)のおかげで主に近くあることができます。掲載されるすばらしい記事にいつも深い感動を覚えます。「レトワール」を読んでいると、私たちがフランスの聖餐会で感じていたのと同じみたまを感じます。

アフリカ、ガボン
リブレビル
フランソア・ピラー、アンマリー・ピラー

聖霊が導いてくださいます

私は天父からのかけがえのない贈り物として、ふたりの幼い女の子を託されています。若い母親として私には、主の道に従って彼女たちを導く責任があります。この特権と、地上における主の教会の会員であることに、心から感謝しています。教会は私たちを幸福と真実に導いてくれる羅針盤のようです。

「リアホナ」(ポルトガル語版)から大きな影響を受けています。読むたびに、主の真実の代弁者である予言者の深い愛を感じます。そして、神のみたまが私と私の家庭を導いてくれるのを感じます。

ブラジル、サンパウロ・ベルディゼステーク部セクエイラワード部
マリア・ルシア・L・M・デ・オリベラ

正しい道へと導く光

「聖徒の道」は、私に勇気と助け、導き、そして励ましを与えてくれます。読んでいるとすばらしい気持ちに満たされます。この優れた出版物に感謝しています。私たち家族にとって、「聖徒の道」はかけがえのない宝物です。世界じゅうの兄弟姉妹についての記事や物語を読むとき、私の心は鼓舞され、あらゆる人々が異なった場所でそれぞれに全力を尽くしていることを実感します。

私はほかの人々にこのすばらしい本を分かち合うのも好きです。どこかへ出かけるときや、長い時間だけかを待たなければならぬときなど、私は必ず「聖徒の道」を持って行きます。こうすると、いつでも読みたいときに読むことができ、この世のほかの雑誌などに心を向けなくて済むからです。「聖徒の道」は正しい道を歩もうとする私たちを導く光なのです。

岡山ステーク部倉敷ワード部
小野紀子



手と心

第二副管長

トーマス・S・モンソン

私たちは、総大会、ステーキ部大会、ワード部大会などで、それぞれの職に召された教会の指導者を、右手を挙げて支持する特権を与えられています。その挙手は私たちの思いを形に表わしたものです。挙手をする人は、指導者を愛し、従うことを心に決めるのです。

主もよく手と心についてお話しになりました。1832年3月にオハイオ州ハイラムで、予言者ジョセフ・スミスを通して授けられた啓示の中では、次のように勧告しておられます。「これを以て汝 忠実なれ。而してわれに命ぜられたる職務に服し、弱きを扶け、垂れたる腕を挙げ、かよわきひざを強うすべし。

而して汝終りまで忠実ならば、汝はわが父の家にわが備えたる住居にありて、不死不滅の冠と永遠の生命とを与えられん。」(教義と聖約81：5-6)

主のこの言葉について深く考えていると、サンダルを履いた昔の人々の足音や、平和なカペナウムの人々が見言葉を聞いて驚嘆するざわめきまでもがはっきりと耳に響いてきます。そこには癒しを受けるために病人を連れ、イエスのみもとに群れを成した人々がいました。手足の不自由だった人が床を取り上げて歩きだし、ローマの百率長の信仰により僕の病は癒されました。



救い主は私たちに、ご自身に倣うよう望んでおられる。すなわち、私たちは弱い人を助け、病める人を癒し、か弱いひざを強めるのに手を用い、また地上における神の王国の建設に心を向けるのである。

イエスは言葉だけでなく、模範を通してお教えになりました。イエスをご自分の神聖な使命に忠実でした。人人が神に近づけるように、そのみ手を差し伸べられたのでした。ガリラヤではハンセン病に苦しむ人が近づいて来て、こう嘆願しました。「主よ、みこころでしたら、きよめていただけるのですが。」

イエスは手を伸ばして、彼にさわり、「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。すると、らい病は直ちにきよめられた。(マタイ 8:2-3) イエスのみ手はそのハンセン病の人の体に触れても、汚されることはありませんでした。そして反対に聖なるみ手に触れられたその人の体が清められたのです。

主はカペナウムのペテロの家でも模範をお示しになりました。ペテロのしゅうとめが熱を出して病の床に伏していた時のことです。聖なる記録にはこう書かれています。「イエスは近寄り、その手をとって起されると、熱が引〔い〕た。」(マルコ 1:31)

会堂司ヤイロの娘の場合も同じでした。子供を持つ人ならその時のヤイロの気持ちをよく理解できることでしょう。主を捜していたヤイロは、主のみ姿を目にするなり、その足元に伏して訴えました。「わたしの幼い娘が死にかかっています。どうぞ、その子がなあって助かりますように、おいでになって、手をおいてやってください。」(マルコ 5:23)

「イエスがまだ話しておられるうちに、会堂司の家から人がきて、『お嬢さんはなくなられました。この上、先生を煩わすには及びません』と言った。

しかしイエスはこれを聞いて会堂司にむかって言われた、『恐れることはない。ただ信じなさい。娘は助かるのだ。』両親が嘆き、周りの人々が悲しむ中、イエスはこう宣言なさったのです。「泣くな、娘は死んだのではない。眠っているだけである。」

イエスは娘の手を取って、呼びかけて言われた、『娘よ、起きなさい。』

するとその霊がもどってきて、娘は即座に立ち上がった。イエスは何か食べ物を与えるように、さしずをされた。(ルカ 8:49-50, 52, 54-55) この時も主はみ手を差し伸べて、娘の手を取られました。

主に深く愛された使徒たちは、その模範をよく心に留めました。主の生涯は、人から奉仕されるためではなく、人々に仕えるためのものでした。また、受けるためではなく、与える生涯であり、ご自分の命を救うためではな

く、人のためにそれを犠牲とする生涯でした。

自分の足元を照らし、人生を導く星を見つけないと願う人は、それを熱心に探し求めなければなりません。しかも、移ろい行く空や自然界の中ではなく、自分自身の心の奥深くに、また主がお示しになった模範の中に求めなければならないのです。

神殿の美しの門でペテロが経験したことを思い起こしてください。そこにいたある男性の状況は同情に値するものでした。彼は生まれた時から足が不自由で、神殿にもうでる人々に施しを請うために、毎日神殿の門の所へ連れて来てもらっていました。ペテロとヨハネが近づいて来た時、この人はふたりに施しを求めました。これは、彼がふたりを、その日自分の前を通り過ぎたおおぜいの人々とまったく同じように見なしていたことを示しています。その時ペテロは厳かに、かつやさしく命じました。「わたしたちを見なさい。」記録には、その男性は「何かもらえるのだらうと期待して、ふたりに注目し」と書かれています。(使徒 3:4-5)

その時ペテロが語った感動的な言葉は、正直な心で神を信じる人々の心を、時の流れを越えて深く揺り動かしてきました。「金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい。」私たちはここまでで引用を終えてしまい、以下の言葉に注意を向けるのを忘れてしまうことがよくあります。「こう言って彼の右手を取って起してやると……

立ち、歩き出した。そして……彼らと共に宮にはいつて行った。」(使徒 3:6-8)

これまで何度も、助けの手が差し伸べられ、病める体が癒され、貴い価値を持つ人々が、さらに神に近い生活をするようになってきました。

時は流れ、環境も、状況も変化していきます。しかし、弱い人を助け、なえた手とよろめくひぎを強めよとの、神の戒めは変わることがありません。私たちは一人一人が、神のみこころを疑うのではなく、それを実践するように、また人に寄りかかるのではなく、人の助けとなるように命じられているのです。しかし、私たちの自己満足という木は、余計な枝をたくさんつけ、春ごとにより多くのつぼみを花咲かせます。私たちはほかの人のすぐそばにいながら、互いに心を通わせることなく生活している場合がよくあります。私たちの周囲には、腕をいっばいに伸ばして、「ギレアデに乳香はないのしょう

か」と嘆き訴える人々がいます。私たちはそれにこたえなければなりません。

エドウィン・マーカムは次のように書いています。
「我々をきょうだいのきずなで結ぶ神のみこころがあ

嘆き悲しむ父親の訴えにこたえて、イエスは死んだ少女の手を取り、「娘よ、起きなさい」と言われた。「するとその霊がもどってきて、娘は即座に立ち上がった。」

る。

自分の道をただひとり行く者はだれもいない。
人のためになすことは、
すべて自分の元へ戻ってくる。」

(『信条』「宗教名詩選」J・D・モリソン編, p.464)
使徒ヨハネは1,900年も前に、「兄弟を……愛さない者は、死のうちにとどまっている」(Iヨハネ3:14)と書いています。

罪を犯した人や不幸に見舞われた人を指差し、「あの人があんなふうになったのは、身から出たさびよ」とあざけったり、「あの人が変わるなんてことは絶対あり得ない。死ぬまで悪人なんだ」と断言したりする人も中にはいます。しかし表面的な見方にとらわれず、人間の真の価値を理解する人もいます。それができるようになると、奇跡が起きます。虐げられた人、失意の人、無力な人々が、「もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者……神の家族」となるのです。(エペソ2:19) 真実の愛には、人の生活とその本質を変える力



があります。

この美しい真理は「マイフェアレディー」の舞台の中でも語られています。花売り娘イライザ・ドゥーリトルは、自分が心を寄せ、後には自分を平凡な境遇から救い上げてくれることになる人物についてこう語りました。

「よくよくおわかりでしょうけど、〔着る物とか言葉遣いとか〕だれが見てもはっきりわかるものを除けば、レディーと花売り娘の違いは、その子がどう振る舞うかではなく、どう扱われるかではないかしら。ヒギンズ先生の前では、私はいつでも花売り娘です。それは彼がいつも私を花売り娘として扱うからです。でも、ピカリング大佐の前では私はレディーでいられます。あなたが私をいつもレディーとして扱ってくださるからです。」（「マイフェアレディー」参照、原作——ジョージ・バーナード・ショー「ピグマリオン」）

イライザ・ドゥーリトルは深遠な真理を述べています。人はうわべだけで判断されて、それに応じた扱い方をされれば、そのままの状態にとどまってしまう。しかし、その可能性と本質を理解し、それにふさわしい接し方をされれば、そのような人間になることができるのです。

事実、救い主ご自身がこの原則を最もよくお教えになりました。イエスは人々を変えられました。人々の習慣、考え、望みを、また気質、性癖、気性を変えられました。イエスは人々の心を変えたのです。主は人々を助け、愛し、赦しを与え、贖われたのです。私たちにはその模範に従おうという気持ちがあるでしょうか。

刑務所長を務めたケニオン・J・スカッター氏は次のような話をしています。

彼の友人がある時、列車の中である若者と隣り合わせました。その若者が失意の中にあるのは、はた目にもすぐわかりました。やがて彼は自分が仮釈放の身で、遠くの刑務所から帰郷する途中だと打ち明けてくれました。彼が刑務所に入れられたために、家族は恥辱を被りました。家族が面会に来てくれることはなく、手紙をくれることもめったにありませんでした。しかし、彼はそれを、貧しくて旅費の都合がつかず、教育がないために手紙が書けないだけだと思うようになりました。しかも、面会も手紙もないという事実がありながら、家族は自分を赦してくれているとの希望を持っていました。

しかし、彼は家族の気持ちを考へて、列車が町外れにある家族の小さな農場のそばを通る時刻に、自分のためにひとつの目印をつけておいてほしい、という手紙を書

刑務所から故郷へ戻る列車の中で、若者は家族が赦しの印として白いリボンをりんごの木に結びつけてくれているように、と願った。

き送りました。もし家族が自分を赦してくれているなら、線路のそばに立つ大きなりんごの木に白いリボンをひとつ結び、もし戻ってほしくないと思っているなら、何もしなくてよいし、自分は列車を降りないで、そのまま西に向けて旅立つと書いたのです。

列車が故郷の町に近づくにつれ、不安な気持ちが募り、彼は窓の外を見ることもできなくなりました。そして隣り合わせたその乗客にこう言ったのです。「もう5分もすれば、機関士が汽笛を鳴らします。故郷の溪谷に入る長いカーブに差しかけた合図です。すみませんが、線路わきのりんごの木を見てもらえませんか。」それを聞いて、彼は若者と席を換わり、そのりんごの木を見ることにしました。それからは、1分という時間が1時間のようにも思えました。やがてその時が来て、汽笛の音が鳴り響きました。若者は「木が見えますか、白いリボンはどうですか」と尋ねました。

返事はこうでした。「ええ、木が見えます。白いリボンひとつどころじゃない、たくさんついています。枝という枝についているんです。よかった、確かに君を愛している人がいるんですよ。」

その瞬間、人生のとげとなっていた苦しみはすべて消え去りました。「まるで奇跡を見ているような気分だった」とその乗客は言いました。確かに彼が見たのは、奇跡でした。私たちも、救い主のように手と心を尽くして隣人を助け、愛し、新しい命に導くなら、同じような奇跡を体験できるでしょう。□

ホームティーチャーへの提案

1. 主は予言者ジョセフ・スミスに次のように言われた。「弱きを助け、垂れたる腕を挙げ、かよわきひざを強うすべし。」（教義と聖約81：5）

2. 真実の愛には人間の生活、気質を変える力がある。

3. イエスは人々の習慣、考え、望み、気質、性癖、気性、心を変えられた。

4. 主は私たちに、ご自分の奉仕の業に倣うよう勧告しておられる。



私はジョシーを忘れない

ブライアン・M・ウェイト

フィリピンで宣教師として働いていた時に、私は、「ジョシー」と呼ばれていたマリア・ジョセリン・カスティエーヨ姉妹に会いました。

ジョシーといとこのネスターに、私たちは最初のレッスンを教えました。ジョシーはみたまが豊かに注がれるのを感じて、モルモン経を読むと同意してくれました。

次に訪問した時に、私たちを心待ちにしていたジョシーとネスターのほかに、5人の関心を持つ人々が集まっていました。その次の訪問では、ジョシーの姉ジュリーと近所に住むいとこたちにも最初のレッスンを教えました。

それはすばらしい集会でした。ジョシーは読書課題をすべて読み終え、モルモン経を自分から読み始めました。そして、すぐにバプテスマチャレンジを受け入れました。しかしバプテスマの日が近づくにつれ、ジョシーが次第に不安を募らせていくのを私は感じました。理由はわかっていました。ジョシーは片足がなく、歩くには松葉づえが必要だったのです。彼女はまた、頭にハンカチを巻いていました。私たちがその事情を知ったのは、3度目の訪問の時です。ジョシーは癌で3年前に足を切断しました。ところがそれは癌の進行を遅らせたにすぎません。苦しい抗癌剤治療が始まり、髪の毛が抜け落ちてしまったので、彼女はハンカチを巻いていたのです。

私たちはためらいを感じましたが、彼女を教会に誘いました。ためらいを感じたというのは、彼女の家が教会から3キロも離れていたからです。教会はその辺りでいちばん高い丘のふもとにありました。彼女は片足しかありませんし、交通機関を利用するお金もあまりありません。私はまさか彼女がほんとうに教会にやって来るとは思いませんでした。

日曜日になり、集会が始まりました。20分後、教会の門をくぐるジョシーといとこの姿が見えました。1歩ごとに痛みで顔を曇らせながらジョシーはやって来ました。私を見た途端、彼女は笑みを浮かべました。私は自分の涙に気づかれぬように、そっと顔を背けました。私は頭痛や疲れで自分が教会を休んだ時のことを思い出しました。そして彼女が来るために払った犠牲に思いをはせ

ました。

ジョシーは決して教会を休みませんでした。私は彼女がせき払いをして痛みを隠そうとすることを見て、癌が進行しているのを知りました。バプテスマの日が来ると、彼女はまだ準備ができていないと言いました。彼女はバプテスマを受けたかかったのですが、みんなの見ている前でハンカチを取るのを恥ずかしく思ったのです。私は短い祈りを捧げ、彼女を励ますことができました。彼女は着替えとタオルを手にし、にっこり笑い「ありがとう」と言いました。

私はジョシーのバプテスマほど、強くみたまを感じたことはありません。彼女も集った人々も皆、涙を流しました。

ジョシーの信仰は、そこで止まりませんでした。彼女は自分の家族全員、隣に住む人々、友達まで改宗に導きました。ついに彼女の母親まで教会に加わったのです。

しかしジョシーの癌は急速に進行し、彼女は来世に赴きました。ジョシーと親しく交際するようになった私には、彼女の死を見るのはつらいことでした。しかしこの若い女性が救い主に近づくのを助けられたことは、私にとって大きな祝福であったと悟りました。

葬儀の日にはワード部の人々が手伝い、ベンジャミン王の語った大きな愛を示しました。彼らがひつぎを墓に降ろすと、ジョシーの母親は失神して、そのまま30秒ほど意識を失っていました。彼女は意識を取り戻すと、天を見上げて静かに3度こう言いました。「アラム コクン ナサーン ナ シヤ」これはタガログ語で「今、彼女がどこにいるかわかりました」という意味です。そして彼女は穏やかに帰って行きました。

私はジョシーから、教会がいかに大切であるか、福音が私たちや友人、家族の生活にどれだけ大きな光を与えてくれるかを学びました。私はジョシーを決して忘れないでしょう。□

彼女の生涯はまさに山登りでした。教会に来ることさえ、例外ではありません。



アルゼンチンに広がる 福音の波

文・写真／ラリー・A・ヒラー

これは歴史の授業ではありませんが、現在の祝福に感謝するためには、過去のことを少し知っておくのもよいことです。

たとえば、次のような話がそうです。1925年のクリスマスの朝、3人の男性がブエノスアイレスにある公園を流れる川のほとりまで歩いて来ました。休日だったその日の朝、町の人々はほとんどまだ熟睡していたことで



しょう。実は、この3人の男性は家族を家に残し、21日間も蒸気船に揺られてここまでたどり着いたのです。十二使徒定員会会員メルビン・J・バラード長老が、福音伝道の地として南アメリカ大陸全土を奉獻するために、ヒーバー・J・グラント大管長から派遣されて来たのでした。

そのような訳で、まだ町が寝静まっているころ、バ

ラード長老は、ルーロン・S・ウエルズ長老、レイ・L・ブラット長老とともに、柳の森へと入って行きました。3人は賛美歌を歌い、モルモン経から聖句を読みました。次にバラード長老が祈りを捧げ、使徒としての権能によって、「南アメリカ諸国の伝道の門戸を開いた」のでした。その時以来、池に石を投げ込むと波紋が広がっていくように、福音のメッセージという波紋が南アメリカ全土に広がっていきました。

バラード長老がブエノスアイレスを訪れてから、最初はわずかだった南アメリカの教会員数も、いまや百万を超えるまでになりました。何万という人たちが毎年教会に加わっています。末日聖徒イエス・キリスト教会の礼拝堂は増加し続けており、神殿も次々と建設されています。



右——セミナー卒業式は早朝 あかしかい 証会で始まる。次ページ、左——セミナーには奉仕が伴う。このスカウトの若人のように、セミナーの生徒たちは、しばしば奉仕活動に参加する。次ページ、右——夕方には特別な式典が開かれ、今年度のセミナーの修了が告げられる。下——新鮮な桑の実摘みも生徒たちの楽しみのひとつである。



中心から

小石を池に投げ込んでできた波紋は、中心から始まって、すぐに消えてなくなるものです。しかし、アルゼンチンの若い末日聖徒としばらく一緒にいると、最初にここから広がっていった福音という波紋が、今でも同じ

場所でやむことなく広がっている事実気づきます。その発展に大きく貢献しているのがセミナーです。

ブエノスアイレスでセミナーの卒業式が開かれる週末は、いつもの週末とは雰囲気が違います。70年近く前にバラード長老は、柳の森の中で力強い祈りを捧げた際、次のように主に願い求めました。「将来主の教会にあって重責を担う若人を憐れみをもって覚えたまえ。みずか





らを清く保ち、……誉れある行く末を成就させたまえ。」アルゼンチンに住む末日聖徒の若人にとって、この祈りに対する最もはっきりとした答えのひとつ、それがセミナーなのです。

エドワード・ラトーレットの言うように、「セミナーは力の源」です。デブラ・アルバレスも次のように語っています。「セミナーこそほくが証^{あかし}を得た場所です。」このような思いは、ブエノスアイレスのセミナーに集う生徒ならだれもが持っています。だからこそ、今週末に開かれるセミナーの卒業式はとても大切な行事なのです。

2月3日記念公園

ブエノスアイレスのセミナーの生徒たちは、この週末の活動を早朝証会で始めます。この証会を開くのに、「2月3日記念公園」ほどふさわしい場所はないでしょう。なぜなら、ここでバラード長老が南アメリカを奉獻したのですから。

土曜日の朝6時、この公園はまだ静かです。やしの木が、薄桃色の夜明けを背景に、まだ黒いシルエットとなっている時間です。眠たげな小鳥たちの声が、これまた眠たげな生徒たちの声と混じり合います。生徒たちは、広場に集まり、祈りを捧げ、よく耳にする証を始めます。「この教会が真実であることを知っています。」「ジョセフ・スミスが予言者であったことを知っています。」

証会が終わると、ビルヒニア、エステバン、カロリーナ、そしてほかの若人たちは公園の中を散歩します。やがて桑の木の周りに集まり、その紫色に熟した実を手も口も紫色になるまで摘んで食べます。彼らがお互いのことを大切に思っていて、一緒に多くの時間を過ごしてきたことがよくわかります。マリア・ホセ・メンフルは次のように語っています。「同じ目標を持ち、同じことを達成しようと頑張っている人たちに囲まれていると、

正しいことを行なうのは簡単になってきます。」

彼らはできるかぎり多くの時間を一緒に過ごし、バスケットボールやサッカー、ボーリングをしたり、ピザやアイスクリームを食べたりしています。それにダンスも大好きです。実は今週の土曜日の夜も、もしセミナーの卒業式がなければダンスをしていたところでした。

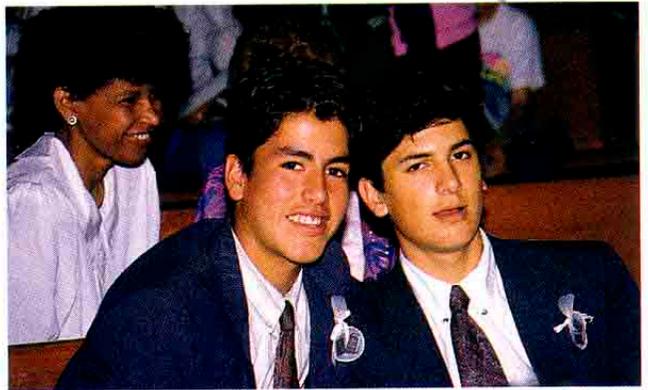
大切な行事

セミナーの卒業式には、単なる式典以上の大切な意味があります。会場になる建物は旗で飾られ、生徒やその家族でにぎわいます。この日、町は豪雨でひざまで水浸しになりましたが、母親たちは式の後半になって食べる食事を皿に盛り、並べていきました。エンパナーダという味付け肉の入ったパイのおいしそうなおいが、建物じゅうに漂い始めます。

式典の内容を見てみましょう。それは、ただ演台の方に歩いて行き、名前を呼ばれ、卒業証書をもらうだけの行事ではありません。生徒と教師、そして指導者の間にはほんとうの愛が感じられます。握手にも心がこもっていて、静かな声で言葉が交わされます。式典は長時間に及びます。しかし、式の後に控えているごちそうの山を気にかけている人もいないようです。ここではセミナーの卒業式はそれくらい大切な行事なのです。本来そうあるべきなのでしょう。

日曜日の朝

翌朝の日曜日、暖かい日差しの中で夜が明けました。空には、ふっくらとした白い雲があちこちに浮かんでいます。ブエノスアイレスは、広い並木道が縦横に走る美しい町です。しばらくすると、どこの歩道や公園も散歩に出かけて来た人でいっぱいになります。末日聖徒イエス・キリスト教会の集会所は、町でいちばんにぎわう場



所のひとつとなっています。ベルグラノーの郊外にある集会所もそうです。ここではフェデリコ・カスコのような若人に会うことができます。フェデリコは、仕事でアメリカに行く予定だった父親に同行し、ディズニーランドを訪れることになっていました。しかし、そのせっかくの機会を捨てて、ベルグラノーに残ることにしました。セミナーへの4年間の皆勤を達成するためです。セミナーを卒業した今、彼はこのように語っています。

「セミナーはぼくの人生を照らす光でした。セミナーのおかげで証^{あかし}を強め、伝道に出る決心をすることができました。」

伝道に出ることは、アルゼンチンの若者にとって容易ではありません。何年もの長い間、高い失業率と極端な



アルゼンチンのセミナリーの生徒たちは、教師のおかげで福音に対する証が^{あかし}強まり、自分たちが受け継いだ靈的遺産が、さらに増し加えられたと感じている。セミナリープログラムは世の避け所であり、アイスクリームを食べながら語り合うひとときも含め、数々の活動を通じて、永続する友情を培うのに役立っている。



PHOTOGRAPHY BY FPG INTERNATIONAL

インフレが続き、最近やっと景気が回復し始めたばかりなのです。ですから18歳以下の若い人たちの就職口は少なく、貯金をするのも至難の業です。ただ、アルバイトがない分、友達とともに過ごしたり、教会で奉仕したりする時間がじゅうぶん持てます。

日曜の夜

マール・ベルタはワード部の日曜学校で第一副会長を



務めており、祭司定員会を管理する監督の補助もしています。フローレンシア・ゴメスは若い女性の書記と初等協会星クラスの教師をしています。ギエルモ・ピットブラッドは日曜学校の会長です。日曜日の夜には、この3人がパチェコの礼拝堂でステーキ部のほかの友達と一緒にいる姿をよく目にします。

彼らは、新たな信仰について学ぼうと必死になってセミナリーにやって来るような最近の改宗者ではありません。その多くは2世、3世の末日聖徒であり、家庭で福音を学んできたのです。しかし、次のように語るディエゴ・グリフィスのような生徒もいます。「教会の会員として育った14年間で学んでいなかったことをすべて、セミナリーの4年間で学びました。ぼくが以前にも増して聖典に親しみ、主の約束について学んだ所はセミナリーなんです。」

さらに、デボラ・ウォーカーも指摘しているように、10代の時はどの年代よりもはるかに多くの誘惑に取り巻かれているようです。ですから、もしセミナリーがなければ、「そのような誘惑に立ち向かうのはずっとむずかしくなるでしょう。」

ワン・ホセ・ソベティの言葉は、それをうまく言い表わしています。「セミナリーは、イエス・キリストについて、またキリストの愛と使命について、自分自身の証を増し加えるのに何より役立ちます。」

イエス・キリストについての回復された知識、すなわちイエス・キリストの使命と戒めに関する回復された知識、それが福音です。この福音こそ約70年前にバラード長老が南アメリカ全土に広がるよう意図したものでした。そしてこの福音伝道の始まった場所で、アルゼンチンの若い末日聖徒たちは、福音の波紋が立ち消えることのないよう努力しているのです。□



親たちよ、 あきらめてはいけない

七十人

F・メルビン・ハモンド

教会でのある集会が終わった後、私はひとりの父親に呼び止められました。ひとり息子が、かつて青少年だったころは将来有望で従順な子供だったのに、成人した今では友達の影響を受けて、反抗したり罪を犯したりするようになったというのです。

寂しそうな顔で、その父親は子供の幼いころの話を始めました。その子もかつては物静かで笑顔を絶やさない子供でした。また、家族の農場で一生懸命働く子だったのです。しかも、いつも神権を尊び、伝道に出たいと考えていました。そして、その目標に向かって一生懸命、貯金を続けていたのです。しかし、今ではその貯金もみな、使い果たしてしまいました。そしてそれと同時に、あのりっぱな目標も、麻薬やアルコール、不道徳な行ないという洪水のために押し流されてしまったのです。

信仰深い母親と父親は、あらゆる手立てを講じて、非行に走った息子を助けようとしていました。愛を示し、教え、穏やかに諭し、祈り、さらに神権指導者の助けも求めました。しかし、この息子は話に耳を傾けることも、ましてやそれに従うことも、かたくなに拒み続けました。「自分の人生なんだから、したいことをするよ。どうせ傷つくのはぼくひとりなんだから」と、両親に向かって荒々しくどなる始末でした。私たちの最初の父祖であるアダムとイヴには、愚かな行動を取った子供もいましたが、息子の受け答えを聞いていると、まるでそんな子供を見ているような思いがしました。アダムとイヴは子供たちに注意深く福音の真理を教え、「息子娘らにすべての事を知らしめた」のでした。

「ここにサタン彼らの中に来りて言いけるは、われもまた神の子なりと、また彼らに命じて言いけるは、アダ

ムとイヴの言を信ずるなかれ、と。されば、彼らアダムとイヴの言を信ずることなくサタンを神よりも愛でたり。」(モーセ5：12-13)

疲れ果て、失意のうちに私に助けを求めて来たこの父親は、木々の生い茂る丘に登り、ひざまずいて天父に心を打ち明けたことも話してくれました。息子が自分自身や他人を傷つけるようなことをしているのに、なぜ息子はそのことに気づかないのか、天父に尋ねてみたというのです。「息子には母親の苦悩が伝わらないのでしょうか。私たちの心の痛みがわからないのでしょうか。どうぞ、天のお父様、私たちのかけがえのない息子があなたを心から必要とするとき、助けてやってください」と。

「私たちに何がしてやれるのでしょうか。」この父親が私に尋ねます。両のほおには涙が伝っています。「あの子は遠くへ行きすぎて、もう戻って来ないのでしょうか。あの子にはもう望みはないのでしょうか。」

この父親の言葉を聞きながら、私は、反抗的な子供であった息子アルマに天のみ使いが語った言葉を思い出していました。「見よ、主はすでに……神の僕である汝の父アルマの祈りも聞きとどけたもうた。汝の父は汝に真理を知らせようとして堅い信仰をもって汝のために祈った。」(モーサヤ27：14) 私は目の前で悲しみに暮れる父親に向かい、「あなたの祈りも確かに聞き届けられています。ですから、できるかぎりのことをしたら、後は愛に満ちた天の御父のみ手にゆだねてください」と慰めの言葉をかけました。そして、信仰深い人にはどんなことでもできるのだから、希望を持ち続けて決してあきらめてはならないと話したのでした。

私たちはまた、もうひとりの父親について話し合いま

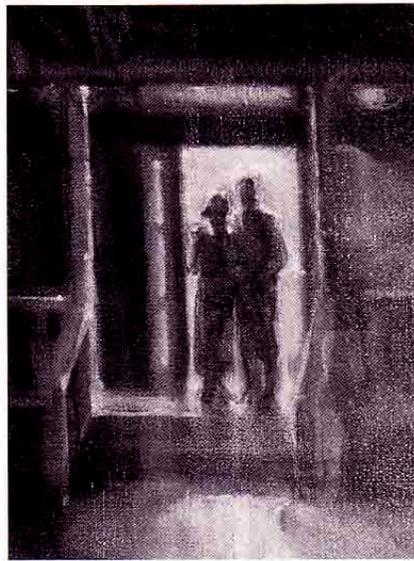
した。かつて天のみ使いと出会ったこの同じアルマが、今度は自分の息子の邪悪な行ないのために悩まされることになるのです。アルマが直面しなければならなかった嘆きとは、息子のコリアントンがゾーラム人に対して伝道しなければならぬ責任を捨てて「浮れ女のイサベルをしたって行った」(アルマ39：3)ことでした。このような道徳的に退廃した行為は、ゾーラム人たちに影響を及ぼし、そのために彼らは福音の

教えを受け入れなくなってしまったのです。アルマは息子にこう言っています。「かれらはお前の悪い行いを見て私の言うことを信じなかった。」(アルマ39：11)

この場面は、父が息子に教える場面としては、最も偉大な記録のひとつとなっています。アルマはまず悔い改めに関して鍵となる教義に焦点を合わせました。コリアントンに、「自分の罪をかれらに自白してお前がこれまでに加えた害悪をとり除け」(アルマ39：13)と言って、自分の罪を認めるよう、強く勧告したのです。そして「罪悪は決して幸福を生じたことはない」(アルマ41：10)と教え、この世の生活で身につけたことは、最終的には復活の時に自分の性格の一部としてよみがえってくるのである、と説きました。(アルマ41：13-15参照)アルマはさらに、救い主イエス・キリストの偉大な贖いによって「憐みは悔改めをする人々に及ぶ」(アルマ42：23)が、悔い改めなければ、正義があるために「律法はこの者に罰を与える」(アルマ42：22)と教えました。最後にこの予言者は息子に、神の憐れみを忘れることなく、「自分の心を地にひれ伏すばかりにへりくだらせよ」(アルマ42：30)と強く勧めて話を終えました。

モルモン経を読むかぎり、強情だったこのアルマの息子も、愛情に満ちた父親の勧告に従い、悔い改めて、伝道地へ戻ったようです。(アルマ42：31；43：1-2；49：30参照)聖典に記録されているこの靈感あふれる物語は、教会のあらゆる親や子供にとって、教義上の指針となるだけでなく、大きな希望を抱かせてくれます。

大切なことは、このような出来事が昔にだけ起こったわけでも、予言者の子供たちだけに限定されて起こったわけでもないということです。私は、あの父親に呼び止められて話をしていた時、知り合いのある青年の話をしました。一時は深いふちに落ち込みながらも、悔い改めを通じて道を見いだした青年の話です。



両親は多大な犠牲を払って、教育を受けさせるために、この青年を大学に送りました。しかし、この青年にはりっぱな成績を修めようなどという向上心も熱意もありませんでした。ただ、「楽しく時間を過ごす」ことができればいいと思っていたのです。大学に入学して間もなく、この青年は小物の万引きに手を染めました。後になって、彼は「ただスリルが欲しくてやった」と述懐しています。やがて、この青年は警察に逮捕され、保護観察処分になりました。しかし、楽しく時間を過ごしたいという思いで、両親から仕送りされたお金を全部浪費してしまい、今度は自暴自棄になって多額のお金を盗もうとしました。再び逮捕され、今度は州の刑務所へ収容されてしまいました。

ある日、この青年の監督が、私がこの刑務所の近くへ出かけるということを知って、私にその青年を訪ねてもらえないかと打診してきました。私は、ステーキ部の高等評議員にも同行してもらうことにしました。私たちの後ろで大きな扉が重たく閉じられました。警備員から入念にボディチェックを受け、その後、殺風景な小さな部屋に通されました。外部の者が収容者との面会を許されている唯一の場所です。

私は頭の中でかたくなな犯罪者の姿を思い浮かべていました。卑屈で、無愛想で、危険で、恐ろしい人物です。その時、扉が開けられ、私が今までに会ったどんな青年にも見劣りのしないひとりの青年が、部屋の中へ通されて来ました。身なりもきちんとし、ひげもそり、髪もよく整えられていました。私を見てほほえむと、握手をしようと手を差し出して、こう言いました。「ステーキ部長、こんな所で何をなさっているんですか。ステーキ部長はきっと私の顔を覚えてはおられないと思いますが、私はステーキ部長が前にステーキ部大会でお話しされたのを聞いた覚えがあります。」それから、真顔になってこう尋ねたのです。「私の家族はどうしていますか。」

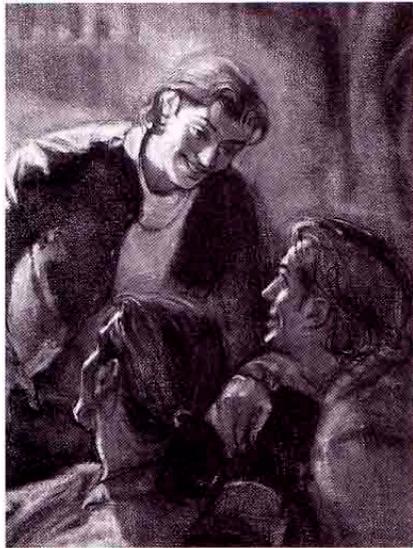
私は両親とも元気でいることを伝えてから、彼自身のことも尋ねました。いつごろ釈放される予定なのかとか、刑務所での処遇はどうかといったことです。彼は寒々とした環境にもかかわらず、いかにも元気そうでした。話が進むうちに、私は彼に、告発されたようなことをほんとうに全部したのかどうか尋ねてみました。率直な答えがすぐに返ってきました。「はい。それ以上のこともし

ました。だから、こうなってもしかたがないんですよ。」そう言って、何もない狭苦しい部屋を指し示しました。「私はほとんど何もかも失ってしまいました。自尊心や友人、そして家族の信頼に至るまで、ほとんどすべてです。」唇がゆがみ、顔つきも苦悩の表情に変わっていきました。そして、とうとう泣きだしたのです。体を震わせて泣き続ける青年を、私は我が子を抱き締めるように、自分の腕の中に抱き締めました。

やがて青年は落ち着きを取り戻し、私たちは話を再開しました。この面会は、この青年に教えるという点では、実にすばらしい機会となりました。彼はへりくだり、熱心に耳を傾けてくれました。話題は、信仰や悔い改め、そして私たちの救い主であるイエス・キリストの神聖な使命にまで及びました。私は、この青年に、キリストがご自分の罪のない命を聖なる犠牲として捧げられたのは、悔い改めて従う人々の罪の代価を支払うためだったということ、重ねて教えました。この青年とともに過ごしている間、私たちはみたまを感じていました。こうして、私の若き友人は心からへりくだり、希望に満たされ、神の愛について一層深く理解したのです。

この青年が刑務所から釈放になった日の朝、愛情深い父親と母親はこの息子を抱き締め、新しい生活を始めようとする息子を心から迎え入れました。3人で私たちの家へも訪ねて来ました。青年はきちんと悔い改め、新しい生活を始めることに熱意を燃やしていました。そして、救い主を心から愛しており、教会活動を通して与えられる祝福によって成長する機会があることに感謝していると私に伝えました。私も、彼に関心を持ち、信頼し、愛していることを告げました。

それから何年かたちました。彼は折にふれて私に電話をしてきて、自分がどんなふう成長しているか、知らせてくれました。とても頑張っているようでした。まだまだ克服しなければならない問題や障害があったとは思いますが、着実に成長している様子でした。私がいちばん感動したのは、彼から「ある若い女性と結婚するために主の宮居へ行くことになりました」という電話をもらった時です。かつての邪悪と絶望の日々を、義と喜びの日々へと、完全に変わることができたのです。これは、主のみたまによって「生命の水」の源へと導かれ、その水を心行くまで飲んだ結果でした。



苦悩に満ちた表情で私を呼び止めて、この青年が完璧に変わったという私の話に耳を傾けていたあの父親は、希望を新たにして帰って行きました。いつの日か、自分の息子もみたまに心を動かされて、悔い改め、イエス・キリストの福音の中でしか見いだすことのできない平安と幸福、安心の源へ必ず戻って来るという希望を抱くことができたのです。この父親は、感謝を込めて、神には不可能なことはないのですから、愛と慈

悲に満ちた天父に変わらぬ信仰を持ち続けます、と書いてくれました。

ここで取り上げたふたつの例は、愛する者たちの罪深い行ないのために苦しんでいるおおぜいの人々の魂の叫びを代表するものかもしれません。苦しみ悩む多くの人々は、希望を失い、失意のうちに、何もかもあきらめてしまっています。

もちろん、あらゆる人々が主の幸福の計画を受け入れるようになる、という約束が与えられているわけではありません。しかし、変わる必要のある人々がいるかぎり、私たちはあきらめるわけにはいかないのです。どんなときでも、希望を抱く余地がどこかにあるはずですよ。

罪や汚れのない状態で主のみ前に行きたいと願うならば、福音の救いの原則を受け入れ、それに従わなければならないことは、当然の条件です。そして、人々がそうした原則を受け入れ従うのは、愛に心が動かされたときなのです。無条件で偽りがなく、しかも与える者受ける者双方の魂を揺さぶるような愛です。そのような愛は、言葉で示されるものではなく、行動で示されるものです。このような愛には、かたくなになった人々の心を和らげる力があり、どんなに極悪な罪人の心にも変化を起こす力があり、あらゆる人々にそのひざをかかめさせて、謙遜な祈りへと導く力が存在するのです。

だからこそ、不従順な子供を持って涙を流している世界じゅうの親たちが、いつでも希望を持ち続けられるのです。親たちは皆、不従順な子供たちに、この深く変わらぬ愛を注ぐことのできる力を授かっています。そして、できるかぎりのことをすべて行なって初めて、「人を救う大きな能力のある」(II コリント 13:14) お方を信じる信仰に頼ることができます。このお方は、そのような子供たちを罪から贖うためにご自分の命を犠牲として捧げられるほど、彼らを愛してくださっているのです。□



PHOTOGRAPHY BY IED CLARK

実行のための計画

若人の広場

ラレーン・ミラー

教会で何かの計画会に出席して、遅く始まったり、いつまでたっても終わらなかつたり、何も決まらなかつたりした経験はありませんか。よい計画会を開くための方法を紹介しましょう。

集会の計画

目的を理解しましょう。何を計画するのか、またなぜ計画するのか、はっきり把握しておく必要があります。話し合うべき事柄が特にならない場合、予定にあるからというだけの理由で集会を開くのはよくありません。

出席者全員に、前もって知らせておきましょう。少なくとも1週間前には知らせておくべきです。そして集会の前に割り当てをしておきます。全員に、考えをまとめて来るように指示します。そうすれば、集まったときにはすでに最初の段階が終わっていることとなります。

委員会の中に、計画中の活動に参加しない人がいる場合、その人に出席を強要しないでください。とはいえ、実際に参加しない人でも、何かよい考えを出してくれることも忘れないでください。

集まる場所を入念に選んでください。どの人にとっても同じくらいの距離にあり、しかもテレビや電話、音楽、人込み、小さな弟や妹などに気を取られ

なくて済む場所にしてください。集まった人たちが気分よく過ごせ、打ち解けられる場所であると同時に、何のために集まったか忘れることがないように、ある程度きちんとした場所であればなりません。

集会の実施

アジェンダ（議事予定案）を作りましょう。話し合う必要のある事項を挙げておき、それを出席者一人一人に渡します。そしてアジェンダにそって話し合うのです。

時間どおりに始めてください。そうすることで、集まってくれた人たちに敬意を払うことができ、会の目的を達成しようという意気込みを皆に伝えられます。

祈りで始めてください。教会関係の集会なので、主の導きを願い求めることは欠かせません。

できるかぎり、輪になって座ってください。そうすれば全員がお互いの顔を見ることができ、話をよく聞くこともできます。指導者は、会の出席者の前や真ん中に立つよりも、彼らと一緒に座った方がいいでしょう。

だれかが記録をつけるようにしてください。詳細にわたる議事録を書く必要はありませんが、意見や報告、そして割り当ての記録くらいはあった方が

よいでしょう。

アジェンダにある各項目について、皆で簡潔に意見を述べ合います。頭に浮かんだ考えを話してもらうための具体的な時間を設定してください。重要なことは、どんな考えに対しても決して否定的な反応を示さないことです。一見関係がなさそうな意見でもかまいません。ひととおり全員に意見を述べてもらったなら、それを足掛かりとして話し合いを進めることができます。意見は必ず書き留めるようにしてください。

意見を評価します。全員の話を聞いてから、出された意見が目標達成に役立つか、予算内で収まるか、実行できるだけの準備は整うか、などを検討するのです。こうして最適なアイデアを選んでください。

全体的な計画を立てます。どこで、

何を、いつ、どのように、だれが行なうかといった詳細を決定します。完了するための締め切りを決めて、割り当てをします。すべてのことがじゅうぶん検討されたか、入念に計画されたか、自発的になされたかを確認します。

責任を委任してください。指導者の立場にある人は、何もかも自分でやろうと思わないでください。出席している人たちは、積極的に参加できた方が計画に対して熱心になれるでしょう。

簡単に復習します。計画したことについて見直し、全員が自分の割り当て、目標や話し合われた内容について理解できたのを確認します。

時間どおりに終わります。これは、始まる時間を守るのと同様に大切なことです。

終わってから、励ましの声をかけてください。割り当てに関して手伝える

ことがあるかどうか、委員の人たちに聞きます。そして割り当てをどのように果たすかは委員に任せます。割り当てが果たされることが大切なのであり、もしあなたなら選んだであろう方法で果たされたかどうかは必ずしも重要ではありません。

出席者として

- 時間どおりに集まり、積極的に話し合いに参加する。
 - 意見、情報、提案を整理して、集会に臨む。
 - 自由に自分の考えを述べる。
 - 企画に関する話し合いに心を集中する。
 - 求められた割り当てを達成する。
 - 熱心な態度で、協力を惜しまない。
-

幕開け

フィリピン、マニラ市のインスティテュートの生徒は、福音をただ学ぶだけでは物足りませんでした。分かち合いたいという望みがあったのです。そこで皆で協力して、聖典や教育を強調したミュージカルを企画しました。両親や青少年が、福音の原則を生活に应用する助けになるようなミュージカルを目標にしました。

自由時間を犠牲にして、生徒たちは演技のけいこやリハーサルに励みました。生徒たちは、観客の反応を見て、努力のかががあったと語っています。感動して涙を流す人もいました。一行

はマニラ市街や近隣の町村を、多彩なショーを披露しながら回りました。参加者のひとりはこのように語っています。

。「すばらしい気持ちを感じ、これまでの努力が報われました。」□





ヤップ島で福音を分かち合う

デオ・G・テレオン

ヤップ島は、グアム島の南東856キロに位置しています。面積は101.3平方キロで、人口は9,350人ほどです。教会は急速に成長していて、末日聖徒の青少年は、たばこ、酒、有害な薬物、檳榔子（檳榔の種子。歯と体に害を及ぼす）を口にしないという評判があります。また末日聖徒の青少年は、島に根強く残っている階級制度を打ち破ったことでも知られています。家族の属する階級にかかわらず、教会ではだれもが皆、神の子として扱われているのです。

先ごろ、ヤップ地方部（ミクロネシア・グアム伝道部）の若い男性と若い女性は、伝道部長と地方部長の管理の下、「一日伝道」のために集まりました。

「私は主が命じたもうたことを行って行く……」というニューファイ第一書第3章7節の暗唱で、一日は始まりました。そして『われらは天の王に』（賛美歌157番）を皆で歌い、同僚を与えられ、訓練を受けました。やがてふたり1組になって、福音を宣べ伝えるために、モルモン経を携えて出かけて行きました。

いくつかの障害もありました。一日じゅう雨に降られましたし、接した人

たちの中には、不快感を示す人もいれば、あからさまに怒りだす人までいました。しかし、彼らは何物にも屈しませんでし

た。

結果として、49冊のモルモン経がこの島で配られました。そして専任宣教師にたくさんの人を紹介することができました。これらの紹介によって、すでに何人かはバプテスマを受けました。

そして一日の終わりに証会が開かれました。レベッカ・K・ブーチュンはこのように言っています。「同僚と私は天父にみたまを祈り求めました。

そして主の力を受けて、モルモン経を2冊差し上げることができました。とても素晴らしい経験でした。いつか専任宣教師になって、またこのような経験をしたいです。」

アンブロス・トゥーンはこう語っています。「これまでの人生で、きょうほど幸せな日はありませんでした。同僚と私は10冊のモルモン経を配ることができたのです。宣教師が主のみ業に携わるために出て行くとき、どんな気持ちを感じるのか、今ならわかります。」□



あかし

証の力



PHOTOGRAPH BY JOHN LUKE; POSED BY MODEL

ヒラリー・ハント

高校生になってしばらくの間、私は教会員であることに少し戸惑いを感じていました。私の宗教が友達の宗教とあまりに違っていただけです。ですから、自分の信念を友達に話すことに、あまり熱心ではありませんでした。

友達を教会に招待するほど勇気を持てたことも1、2度ありましたが、そんなときは、断食安息日に当たらないよう特別注意を払いました。初めから

あかし 証会へ連れて行ったら、友達は二度と教会に来なくなるだろうと思ったのです。しかし、ある夏、証会の力について教訓を得ました。

学校は休みに入り、花が咲いていました。妹のナタリーと私はユースカンファレンスの日が来るのを待ちわびていました。ナタリーはいつものように、友達を連れて行くつもりでした。タレネとアンヘルという名前の、教会員ではない友達です。カンファレンスの証

会はともかくとして、ユースカンファレンス自体は気に入ってくれるだろうと思いました。

セミナーやダンス、グループ活動など、みんなでもとても楽しく過ごしました。そして、週末の最後の活動となりました。日曜日の証会です。

みたまが強く注がれ、私たちの心を大きく開いてくれたようでした。きっと、部屋にいただれもがみたまを感じたことでしょう。でも、タレネとアンヘルは、私たちがマイクの前に立ってほかの人に自分の気持ちを打ち明けるのを見て、モルモンは変な人たちだと考えたのではないかと思わずにいらませんでした。

ところが、気がつくと、タレネがマイクの前に立ち、証を述べているではありませんか。彼女がそんなことをするなんて思いも寄らせませんでした。タレネは皆に向かって、自分は末日聖徒ではないけれども、カンファレンスに参加して、この教会には何か特別なものがあると感じたと言いました。ほかの人と同様、彼女も驚くべきみたまの力を感じたのでしょう。

少し内気なアンヘルは証を述べたりしませんでした。ほんとうは自分も証したかったと、後で話してくれました。やがて彼女は教会に入りました。

あの証会の日、私は証会が力強い伝道的手段となり得ることを学びました。証会には強いみたまの力が注がれるからです。また、人がどう思うか気にしたり、戸惑ったりするあまり、それが福音を分かち合う妨げとなるようではいけないと思うようになりました。末日聖徒であることを恥じる理由など何もないのです。□

「主のごとくに」

救い主は、ニーファイ人と一緒におられた間、次のような突き詰めた質問をされました。「汝らはいかなる人物にてあるべきか。」そして、次のようなチャレンジに満ちた答えを与えられました。「まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」(III ニーファイ27：27)

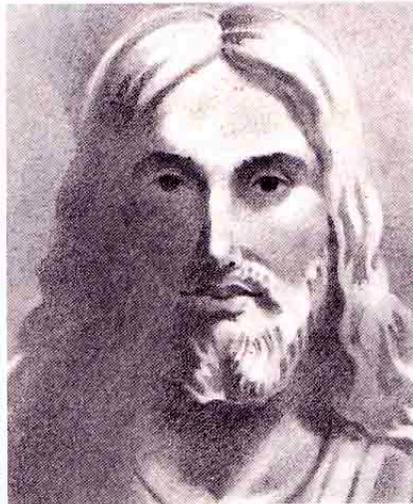
1995年度の家庭訪問メッセージは、賛美歌『さらに聖くなお努めん』(74番)に要約されているイエスの特質に重点が置かれます。この賛美歌は、救い主のようにになりたいという私たちの心からの願いを歌ったものです。

ハワード・W・ハンター大管長はこのように教えています。「かつてこの世が目にした唯一の完全で罪のない模範者キリストのようになるために、力の限りを尽くし、あらゆる努力を払わなければなりません。」(『汝らはいかなる人物にてあるべきか』「聖徒の道」1994年7月号、p.67)

救い主がどのような人物であり、また私たちがどのような人物であるべきかを考えるとき、ほかのどのような特質にも勝ってはっきりしているのは救い主の愛です。世界じゅうに広がる教会の会員である私たちは、それぞれ異なった言語や文化、教育水準や経済状況に置かれています。10代の人もいれば、90歳を超えた人もいます。健康な人や物質的に裕福な人がいる一方で、病気や貧困、孤独と闘っている人もいます。しかし、私たちがだれであろうと、またどんな苦難や苦境にあろうとも、救い主の愛は私たちに注がれています。

そして私たちは、今度はその愛をほかの人々に差し出す特権にあずかっているのです。

トーマス・S・モンソン副管長が、キャサリン・マッキー姉妹について話したことがありました。彼女は、モン



ILLUSTRATED BY DILLEEN MARSH

ソン副管長が彼女の監督をしていた時に亡くなりました。マッキー姉妹には家族がいなかったため、生前、モンソン監督に自分のわずかばかりの財産をだれかに譲ってくれるよう頼んでいました。また、3羽のカナリアを飼ってくれる家を探してほしいとも言っていました。2羽は美しいカナリアだったので、友達の家にもらわれて行くことになりました。けれども、残りのカナリアは羽が灰色っぽくみすぼろしかったので、モンソン家で引き取ることになりました。マッキー姉妹はこう言いました。「そのカナリアはきれいじゃないけど、歌はいちばん上手なんですよ。」

モンソン監督は、マッキー姉妹は彼女の大好きなカナリアのような人だった、と語っています。取り立てて美しくもなく、たくさんの子供にも恵まれませんでしたが、困っている多くの隣り人の力となり、近所に住む体の不自由な人を毎日のように訪ねては話し相手となり、触れ合うすべての人の人生を明るくしたのです。(「エンサイン」1987年8月号、p.2参照)

自分にはほかの人に与えるものなど何もないと思う人もいるでしょう。しかし事実は、私たちは皆、人と分かち

合えるすばらしい賜を救い主から授かっているのです。ゴードン・B・ヒンクレー副管長はこのように述べています。「私たちの天父はその娘たちにかけてあげないすばらしい力を与えてくださいました。それは、苦しんでいる人に手を差し伸べ、慰めと助けを与え、傷口に包帯を巻き、傷ついた心を癒す力です。」(『あなたの内なる神の賜を伸ばしなさい』「聖徒の道」1990年1月号、p.98)

ボリビアに住むケチュア族のリディア・ガンティアー姉妹は、彼女の限られた財産をほかの人と分かち合うことにより、救い主の愛の手本となっています。彼女は仕事で料理を手伝うとき、ワード部の困っている人々のために、肉の切れ端を取っておきます。また、ポップコーンを作るときには、はじけなかったとうもろこしの粒を取っておきます。彼女はこう言っています。「これは鳥にあげるの。鳥だっておなかですくものね。」神の被造物すべてに対する関心が、彼女の日々の行ないから伝わってきます。彼女は、ほかの人を助けるために、自分の持っているものを何でも真心から与えているのです。

今年は、救い主のようになろうと互いに努め、私たちの内にある神の賜を見いだし、それをほかの人と分かち合しましょう。

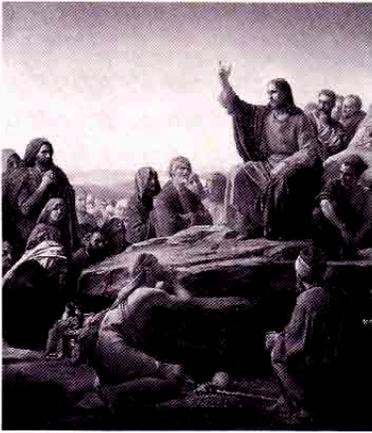
●主はどのようにして、私たちがもっと主のようになるのを助けてくださるでしょうか。

●聖霊を通して、どのような神の賜が与えられるでしょうか。(教義と聖約46章；モロナイ7：47-48参照)

●すべての行ないにおいて救い主のようになることによって、私たちはどのようなみたまの実を味わうことができるでしょうか。(ガラテヤ5：22-25参照) □

垂訓中の垂訓

ダネル・W・バックマン



オリバー・ウェンデル・ホームズはこう述べています。「ほとんどの人は山上の垂訓を人生の航海の旗として喜んで掲げるが、それを、船を操るかじとする人はあまりいない。」(アルバート・M・ウェルズ・ジュニア編「現代と古代の心を鼓舞する名言集」p.63)

山上の垂訓の中で、イエスは一段高い福音の律法を教えられました。この垂訓の話はマタイによる福音書第5章から第7章に記されています。イエスは後に、同じ原則をさらに完全な形でニーフアイ人に繰り返していらっやいます。それはニーフアイ第三書第12章から第14章に記録されているとおりです。山上の垂訓は系統立った神学の優れた声明と言えます。クリスチャンとしての行動基準を定めたものでもあります。つまり、私たちの行ないを方

向づけるかじであり、私たちの霊的成長を測るのに用いることのできる、大切な物差しなのです。

内なる人

主は山上の垂訓中、ある重要な箇所で霊的な生活と礼拝の3つの要素について述べておられます。それは施しと祈り、断食です。(IIIニーフアイ13:1-18; マタイ6:1-18参照) ここで救い主は、よい行ないだけが福音の目標とするところではないと教えていらっやいます。私たちは自分の行動だけでなく、自分の心の姿勢や動機に対しても責任を負うのです。よい行ないも、よくない動機からなされれば、それは偽善なのです。

主は私たちに、人から見られるために正しい行ないをすることのないよう「注意なさい」と警告しておられます。また、自分のする施しを誇ったり、これ見よがしの祈りをしたり、苦しげな顔つきで断食をしたりすることのないように警告していらっやいます。(IIIニーフアイ13:1-2, 5, 16参照) 人から褒められようとする誘惑を退けるためには、人に知られないように、ひそかによい行ないをしなければなりません。

人から褒められるために霊的な人物を装う人は、公の称賛は得るかもしれませんが。「救いを求めるのも^{ほろ}亡びを求めるのも」(アルマ29:4) 神は私た

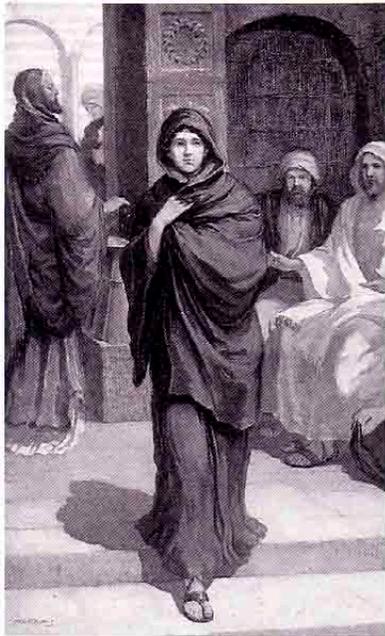
ちの望みや意志に任せられるからです。しかし天父からの承認は、私たちの目的がふさわしく、利己的でないときにこそ与えられるのです。主だけがご覧になる義にかなった「ひそか」な行ないは公に報われると、主は約束しておられます。(IIIニーフアイ13:4, 6, 18参照)

しかしながら、この公の報いは必ずしも現世で目にできないかもしれません。(マラキ3:1-18参照) 正しい者にも正しくない者にも雨は降り続くでしょう。(マタイ5:45参照) しかし、正しい動機を持ち、心から義を行なう弟子は、神に仕え、神と交わる時に与えられる内なる平安に満足するでしょう。

施し

何年も前、家族と休暇を過ごした時のことです。妻のパットと私は、カンザス中部の町にある公園にピクニックに出かけ、我が家の4人の小さな子供たちと昼食を楽しみました。そしてもう帰ろうとした時に、ひとりの男の人が車に乗ったパットに近づいて来て、食べ物何か分けてもらえないかと言いました。私たちは戸惑いながら互いに目くばせし、そして断わってしまいました。するとその人は「失礼しました」と言って、私たちがこれまで使っていたテーブルの傍らに腰を下ろしました。





THE WIDOW'S MITE. BY FRANK ADAMS

「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ。みんなの者はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人は……あらゆる持ち物……を入れたからである。」(マルコ12：43-44)

不意に私は、自分の思いやりのなさを感じました。あの男性はほんとうに助けを必要としていたかもしれないのに、私は判断を誤ったのではないかと思いました。そうすると「彼を助けた」という気持ちになりました。

そこでパットに自分の気持ちを告げると、彼女もほっとしたようでした。「食べ物にはたくさんあるわ。用意するから、あの方の所に持って行ってくださらない。」そう言うと彼女は、食べる物をたっぷり皿に盛ってくれまし

た。

その男性は喜び、親しく話をしてくれました。私は最初の対応の失礼をわびましたが、気にしていないようでした。彼は食べ物の中で礼を言ってから、自分はダコタで小麦の刈り入れをした帰りで、長い間何も食べていなかったと話しました。

それは簡単なことでした。簡単なことだったからこそ、断わろうという最初の衝動に屈したのが恥ずかしくなります。

このような経験を通して、私たちはそれぞれ、自分が利己的な場合と寛大な場合でどう感じるか、その違いを理解するようになるのです。きっとだれもが、もっとしばしば後者の気持ちを感じたいと思っていることでしょう。そして自分自身をほかの人々に捧げるときに、そのように感じられるのです。

私たち一人一人にはひとつの特別な機会が与えられています。それは毎月の断食献金を納める機会です。この施しの行為は比較的容易です。しかもひそかに、惜しみなく行なえます。スペンサー・W・キンボール大管長は次のように述べています。「できる状態であればもっと多く……の金額を納めるべきである。」(『主、その民をシオンと呼びたまえり』「聖徒の道」1984年12月号、pp. 8-9)

祈……り

心からのひそかな祈りと、心のこもらない、これ見よがしの冗長な祈りの違いは、イエスの話されたパリサイ人と取税人のたとえ話の中に例証されています。イエスが述べられたところによれば、自分を高くして祈ったパリサ

イ人は、うわべだけのむなしい言葉で「ひとりでこう祈った」とあり、他方、自分を低くして祈った取税人は、神の前に「義とされて自分の家に帰った」とあります。(ルカ18：9-14参照)

私は高等評議員であった時、ひそかな祈りについてとてもよい経験をしました。新たに支持を受けたステーキ部長との最初の集会で、ステーキ部長は厳しく、多くの要求をしました。前任者のやさしく穏やかな物腰とはまったくの好対照でした。高等評議員の何人かは、ステーキ部長の姿勢に否定的な反応を示しました。その集会の中で、私は、次のワード部大会の神権会で話をする割り当てを受けました。彼から割り当てを受けた時、私の心に、話で取り上げるべきテーマについてある考えが浮かび、私はそれを急いで書き留めました。しかしその後、話の準備をする時、そのメモや促しを受けたことを忘れていました。

私は話を終えると、うまくいかなかったという憂うつな気持ちになりました。その後、私はひとりになって、ひざまずき、なぜ一生懸命に準備したのにうまくいかなかったのかその訳を主に尋ねました。すると、話すべきことを話さなかったという気持ちになりました。それと同時に、以前に心に感じたことを思い出し、自分がそれに従わなかったことに気づきました。そこで私は主におわびし、沈んだ気持ちでワード部大会の聖餐会に向かいました。

開会の賛美歌の時、私はもう一度祈るようにとの促しを感じました。そこで私はもう一度機会を与えてくださるよう主に願い求め、今度は適切な話をします、と主に告げました。私は自分がなぜそのように厚かましいお願い



パリサイ人は自分が罪人でないことを神に感謝したが、取税人は、「罪人のわたしをおゆるしください」と神にお願い願った。イエスは、「自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」と言われた。(ルカ18:10-14)

をしたのかわかりませんでした。大会のプログラムはすでに決まっており、私には話をする機会がないことを知っていたからです。ところが会の半ばで賛美歌を歌っている時、ステーキ部長が監督の方に体を寄せて、何かささやいているのに気づきました。そして賛美歌の後、監督は次のように発表しました。「ステーキ部長の要請により、バックマン兄弟に短く証を述べていただきます。」

私はとても感動して、今何が起こったかを説明し、新しいステーキ部長の受けた靈感について証しました。すると私と同じように、会衆の中に座っていたほかの高等評議員たち数人の目に涙が光りました。それから私は、主に約束したとおりの話を短く述べて、席に着きました。この2時間ほどの出来事に、私は強い衝撃を受けました。

私は閉会の賛美歌の間、なお一連の出来事に思いをはせながら聴衆を前に座っていました。すると突然、賛美歌の一節が思い浮かび、私の心を貫きました。「わが祈りを神は聞きたもう」(『ひそかな祈り』79番) 私は再びあふれ出る涙を抑えられませんでした。

それ以来、私がかつて教会内で経験した神権者たちとの交わりのうち、最もすばらしいもののひとつが始まりました。4年間、この偉大な人物のそば

で、靈感や指導性、教会の管理について学んだのです。

断...食

私は専任宣教師の時、心からの断食の重要性を学びました。私たちが教えていた家族は、いちばん上の娘さんを除いた全員がバプテスマを間近に控えていました。長女である彼女は、家族のほかのだれよりも霊的なことに敏感でした。しかし、彼女が教会に入ることを何かが妨げていました。

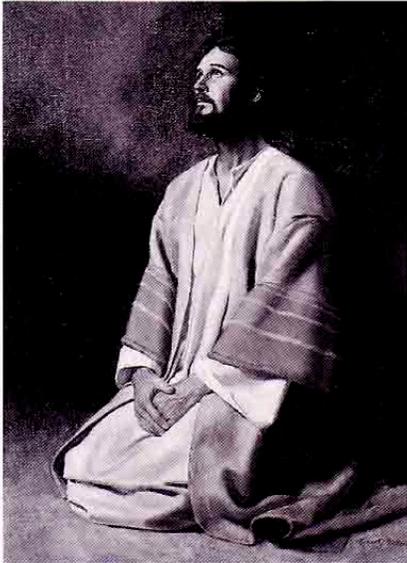
通常のある断食日曜日、同僚と私は、彼女の家族と一緒に彼女のために断食しました。そして聖餐会の後、私たちは少しの時間、その家族と話をしていました。同僚が彼女や母親と話していた時に、私は驚くべき霊的な経験をしました。それは私たちの心に真理の光を注ぐ経験でした。みたまが私に、彼女のバプテスマの妨げになっていた事柄を明らかにしてくれたのです。彼女には、彼女自身が通っていた教会にボーイフレンドがいて、彼はこれまで何度か霊的なあらわれを受けたことがありました。彼女は、教会に入ることととても大切なものを捨てることになるのではないかと心配していたのです。続いて私は、主が彼女を個人的にご存じであり、彼女の心配事を理解しておられ、彼女に豊かな祝福を注ごうと備えておられることを、みたまによって

金持ちの若い役人は、自分の持ち物を貧しい人々に与えるようイエスから勧告を受けた。(ルカ18:18-24参照) 同様に私たちも、神を生活の中心とするかどうか選ばなければならない。





CHRIST AND THE YOUNG MAN, BY HEINRICH HOFMANN



イエスは施しと祈り、断食について教えた後、私たちはふたりの主人に兼ね仕えることはできないことを強調された。私たちは神に仕えるか、富に仕えるか、どちらかを選ばなければならないのである。

知ったのでした。

私は興奮して、同僚の話に割って入り、「何が問題がわかりましたよ」と言いました。母親も娘も驚いた様子でしたが、たった今聖霊から知らされたばかりのことを説明すると、ふたりは涙ぐみました。そこで私は、もしも彼女が福音を受け入れるなら、これまで夢に描いていた以上の祝福が確かに与えられます、と証しました。それから私たちは祈り、次の約束のために出かけました。

彼女の涙を思い出すと私は心配になりました。彼女を傷つけてしまったのではないかと思ったのです。しかし翌

日の夜、私たちが巡回宣教師とともにその家族の所へバプテスマの面接に行くと、彼女からこう尋ねられました。

「私も面接してくれませんか。」

「いいですとも。」私は驚いて答えました。「でも、何があったのか話してもらえますか。」すると彼女は、私の言ったとおりであること、私の述べた約束について、みたまが彼女にも証したことを話してくれました。こうして彼女は、家族とともにバプテスマを受けました。あの日に心からの断食をしたことで、私たち全員になんと豊かな祝福が与えられたことでしょう。

神に仕えるか、富に仕えるか

救い主は施しと祈り、断食について勧告した後、地上に宝を蓄えるのではなく、「天に、己れのために宝を貯えよ。汝らの宝のある所に汝らの心もまたあるべければなり」(III ニーフアイ 13:20-21) と警告されました。

次に救い主は、私たちはふたりの主人に兼ね仕えることはできないとおっしゃいました。私たちは神に仕えるか、富に仕えるか、どちらかを選ばなければならないのです。(III ニーフアイ 13:24参照)

旧約の時代に、主はご自分の民に偶像崇拜に陥ることや異教の神々を礼拝することについて警告を寄せられました。私たちの時代において、偶像崇拜に結びつく最大の誘惑は、おそらく富でしょう。確かに富は、正しく用いることもできますが、偶像崇拜と同じように、私たちの霊的な幸福を損なうこともあるのです。イエスは「富の惑わし」(マタイ13:22)について注意なさいました。また、スペンサー・W・

キンボール大管長が教えているように、偶像崇拜は神よりもむしろこの世のものに信頼を置くことにあるのです。(『偽りの神々』「聖徒の道」1977年8月号, pp.349-352参照)

だからこそ私たちは、神と交わすことのできる最も大いなる誓約のひとつとして、自分自身と自分の財産を神と神の教会にすべて捧げる必要があります。もしも私たちが主に従ってこれらのものを喜んで捧げなければ、世のものが私たちの主人になることでしょう。

イエスはルカによる福音書第16章の不正な家令のたとえ話に続く解説の中で、宝と富についてのこれらの教えをさらに発展させておられます。ご自分の弟子たちに、「不正の富」(9節)を用いても天の友を作るようお勧めになったのです。言い換えれば、物質的な財産は賢明に用いるべき賜だということです。もしも私たちが富の用い方において「不正」ではなく忠実であるならば、すなわち富に治められるのではなく、富を治めるならば、「真の富」すなわち天の宝が私たちに任されるのです。(11節参照)

私たちは末日聖徒として、自分自身の義の定義ではなく、主の義の定義に基づいて自分の人格をはぐくまなければなりません。私たちの時代の一般に見られる罪について、主はこうおっしゃっています。「彼らは主の義を打建てんために主を求めずして、あらゆる者おのが心のままに振舞いおのれの神の姿を求む。」(教義と聖約1:16)

山上の垂訓は、垂訓中の垂訓であり、私たちの人生を方向づけるかじとなります。そして、主が義とされる方式に従った生き方を教えてくれるのです。

□

神を仰ぎ見て生きよ



PHOTOGRAPH BY JOHN LUKE

罪は、苦い悲しみと暗黒をもたらし、
悔い改めは、甘美な喜びと光をもたらす。
(アルマ41：10参照)

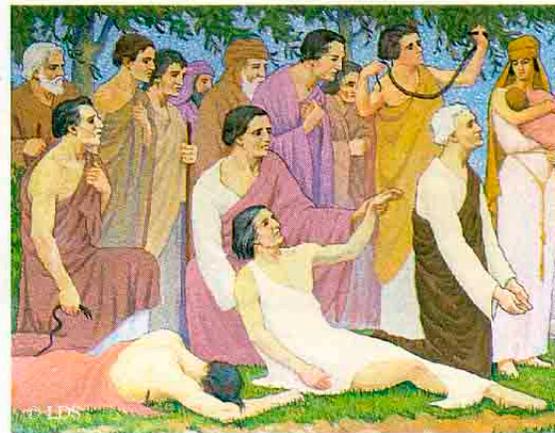


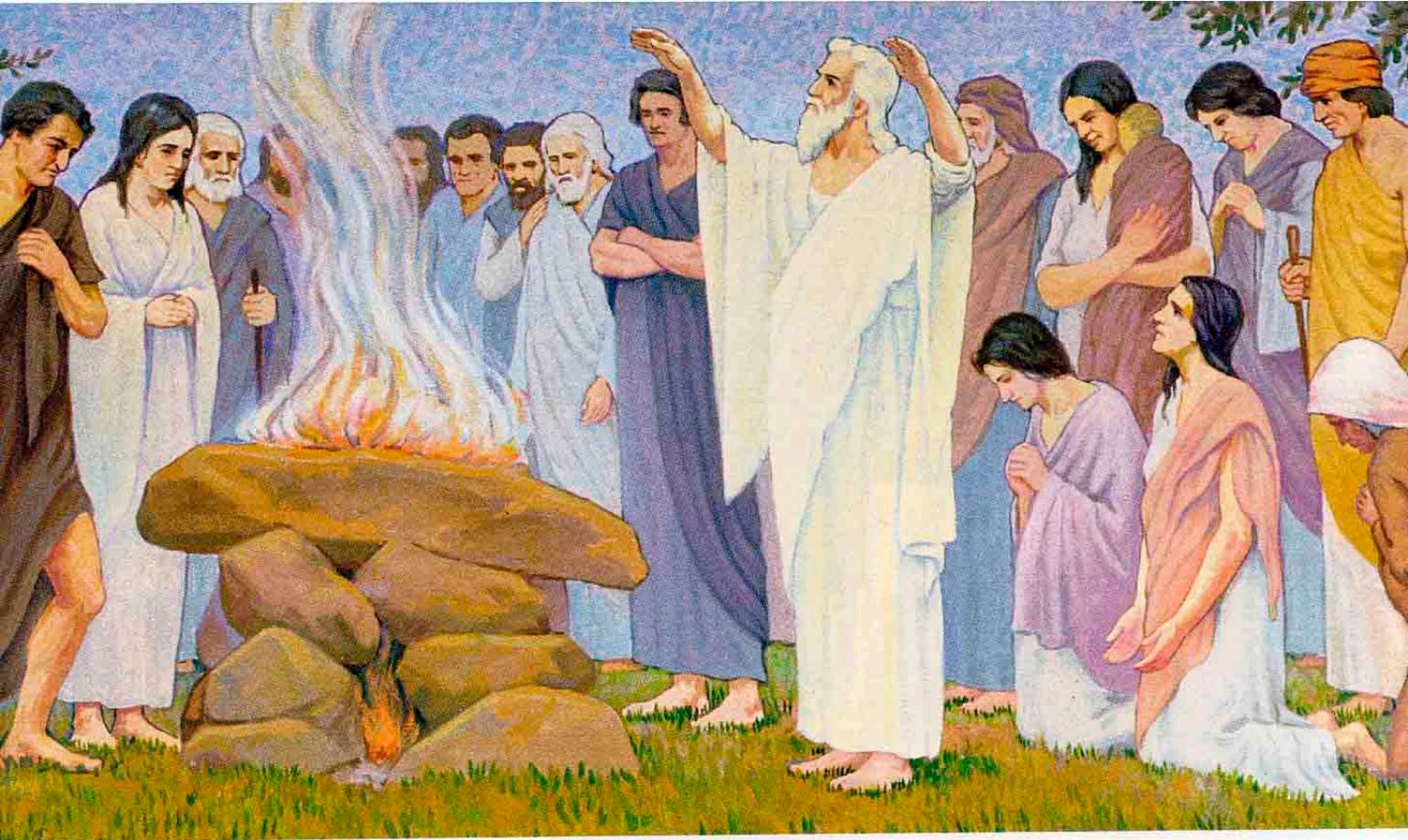
神の独り子の生き写し

Ｒ・バル・ジョンソン

アルバータ神殿の完成を間近に控えた1920年代初頭、教会は何人かの芸術家をカナダに派遣し、儀式の部屋の壁画を描かせました。これらの芸術家たちはバプテスマフォントや礼拝堂、月の光栄の部屋の壁面に、人々の心を救い主の贖い^{あがな}に向けさせるような光景を描くよう依頼されていました。バプテスマフォントと礼拝堂の壁画は、ユタ大学の美術教授だったアルマ・ブロッカーマン・ライト（以下A・B・ライト）によって描かれたものです。月の光栄の部屋に描かれた光景は、レ・コンテ・スチュアートの壁画のひとつです。当時スチュアートは若く才能豊かな芸術家で、後に風景画家として世界的に有名になりました。（「エンサイン」1977年7月号，pp. 6-11；同1978年7月号，pp.40-45のポール・L・アンダーソンによる記事参照）

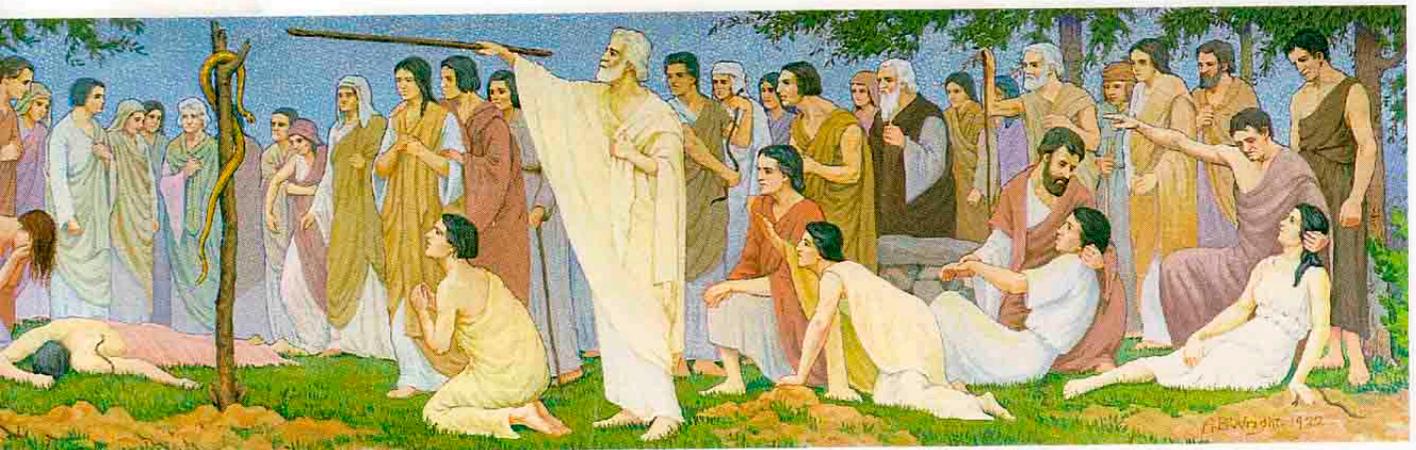
70年を経た今も、これらの壁画は、イエス・キリストへの信仰に固くつながってられるよう、神殿を訪れる人々の心を鼓舞しています。また、ちょうど風の吹き渡るカナダ西部の草原地帯にアルバータ神殿が岩のように固く立っているように、キリストへの人々の信仰も逆境の風に負けず固く立っています。

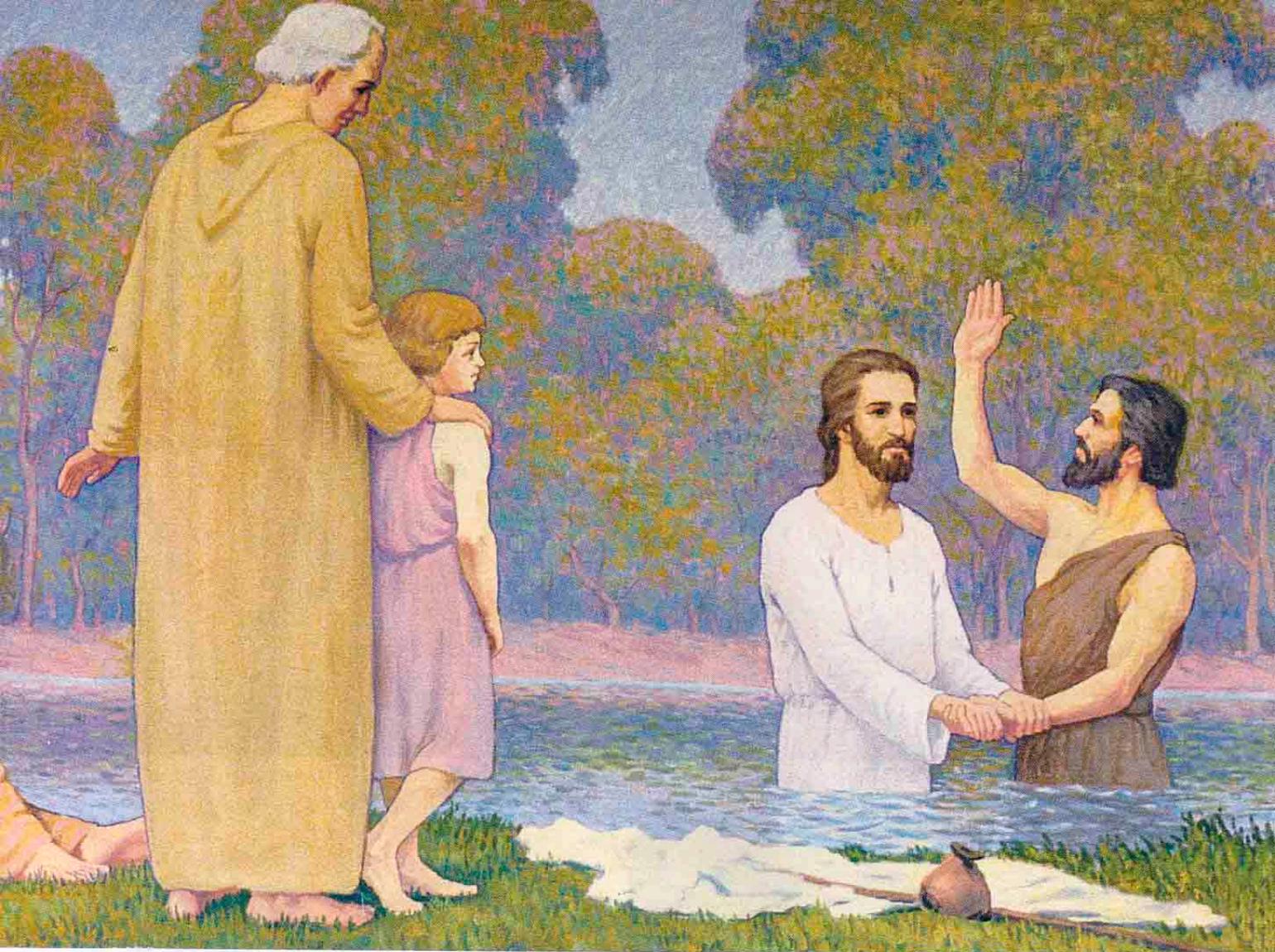




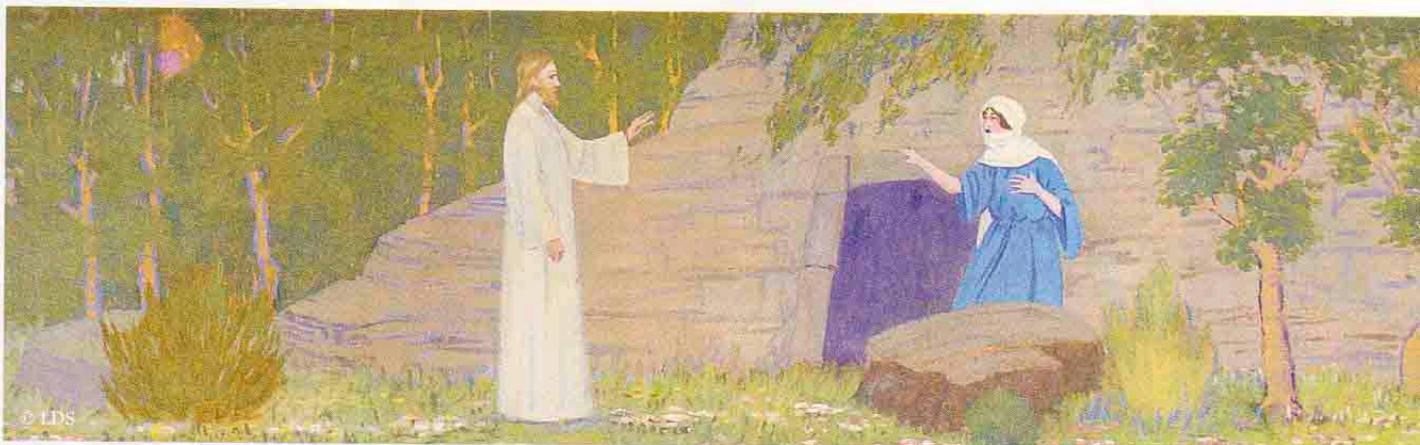
上——「犠牲を捧げるアダム」A・B・ライト画。アルバータ神殿のバプテスマフォント。主の戒めに従い、アダムは「ただ独りの御子が犠牲となりたもうたことのひながた」(モーセ5：7)として犠牲を捧げた。

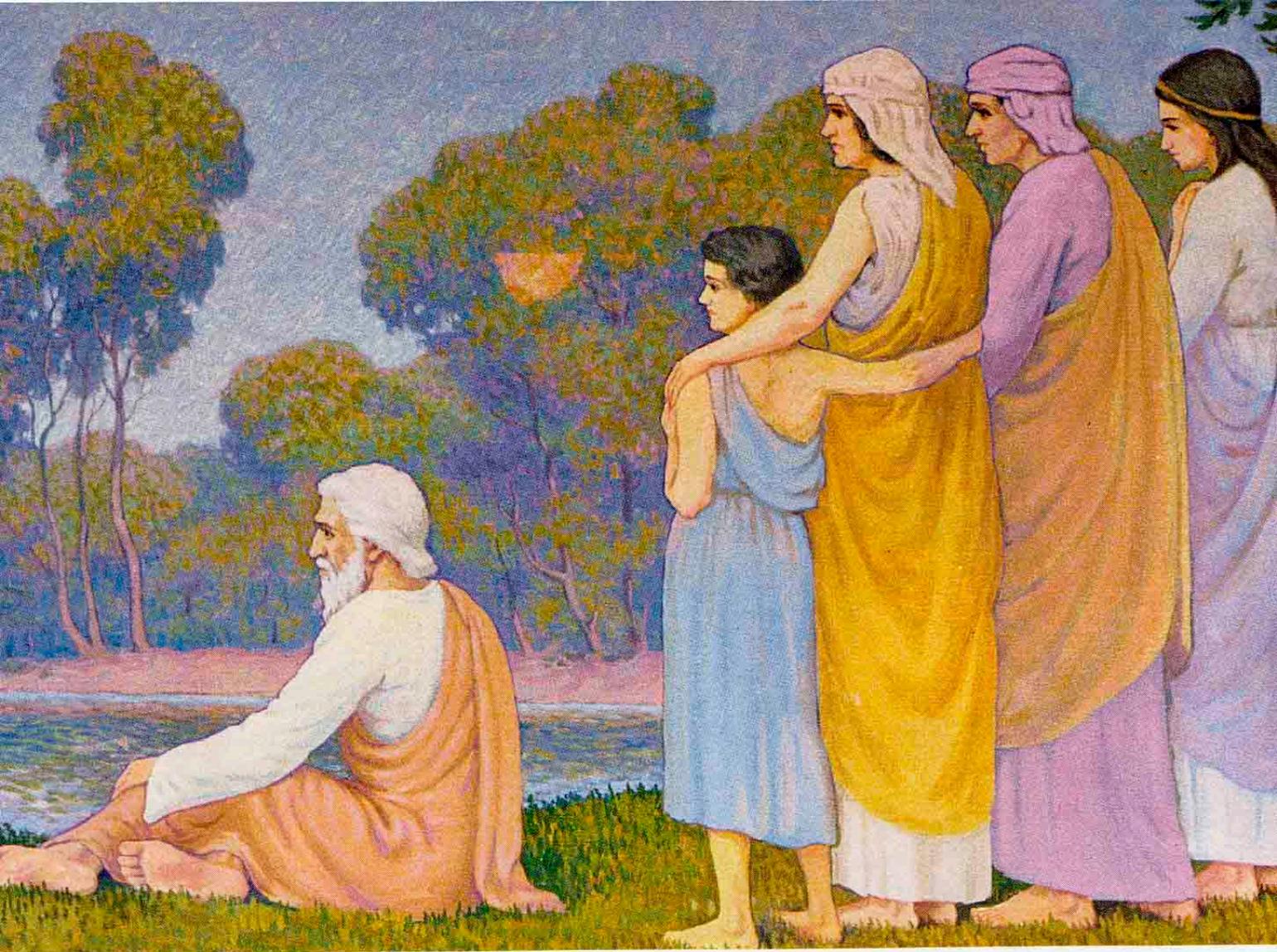
下——「イスラエルの民を導くモーセ」A・B・ライト画。アルバータ神殿のバプテスマフォント。イスラエルの民が毒蛇にかまれた時にモーセはかれらの前に黄銅の蛇を付けた棒を立てた。それはキリストの贖罪と癒しの力を象徴していた。(Ⅱニーファイ25：20参照)





聖徒の道
1995年2月号
36





「イエス・キリストのバプテスマ」A・B・ライト画。アルバータ神殿のバプテスマフォント。「すべての正しいことを成就する」(マタイ3:15)のために、また、人が聖霊を受けるための「門が狭い」(Ⅱニーファイ31:5-13参照)ことを世の人に示すために、キリストはヨハネからバプテスマをお受けになった。

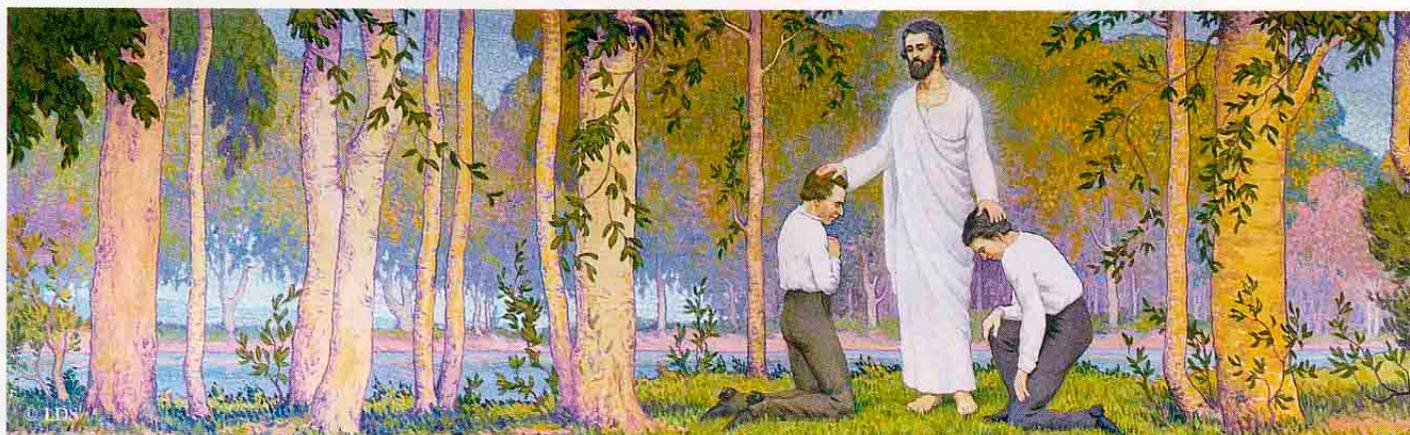


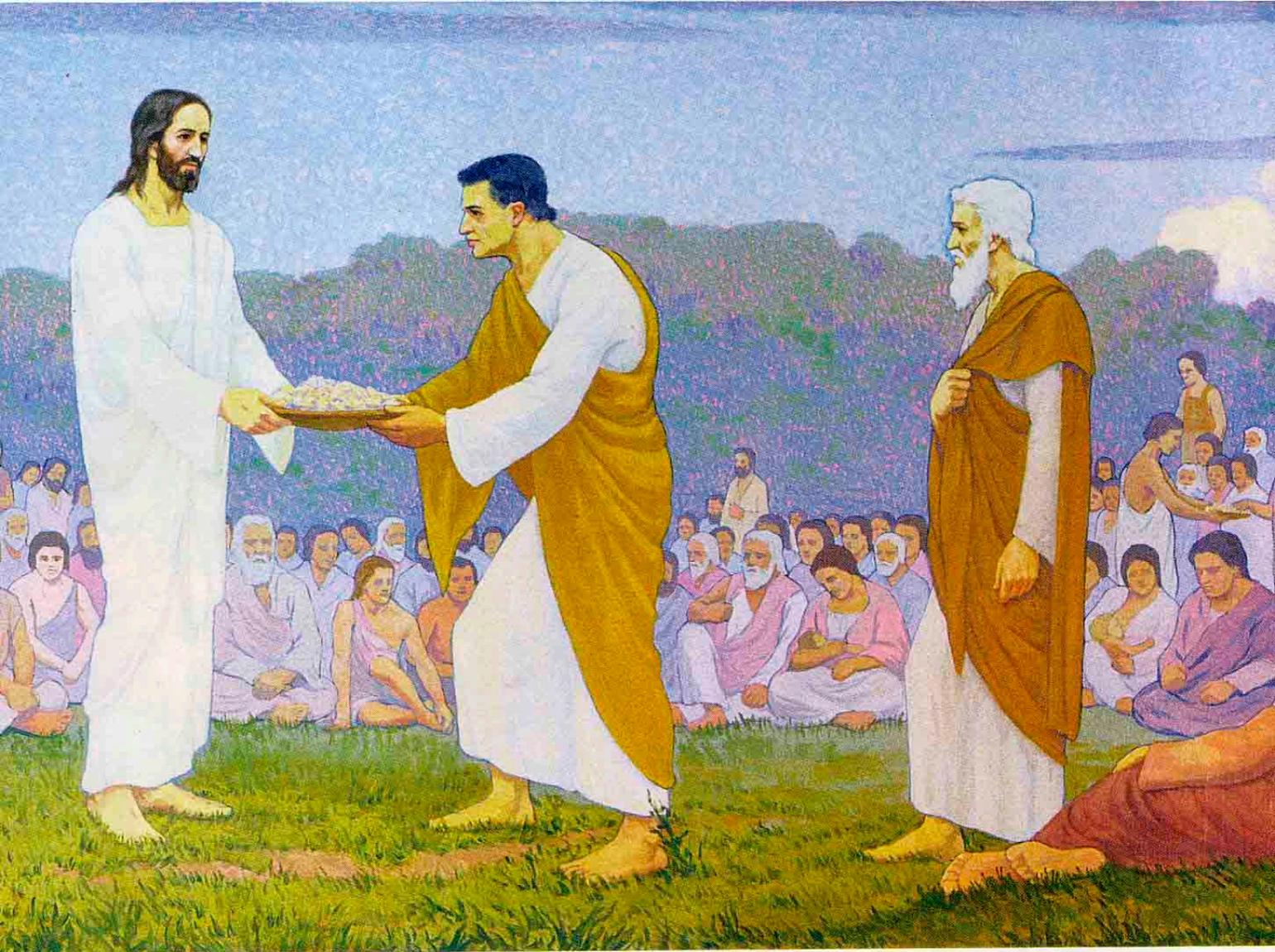
「復活した主、マリヤにみ姿を現わされる」レ・コンテ・スチュアート画。アルバータ神殿の月の光栄の部屋。復活した主は泣いているマリヤに「だれを捜しているのか」とお尋ねになった。それに対するマリヤの答えには信仰と喜びが表われている。「ラボニ」と言った。それは、先生という意味である。」(ヨハネ20:15-16)



© LDS

「ニーファイ第三書第18章」A・B・ライト画。アルパータ神殿の礼拝堂。エルサレムでなされたように、イエスは新大陸の弟子たちにも主の贖いの記念に聖餐の象徴を受けることをお教えになった。





「回復された神の権能」A・B・ライト画。アルバータ神殿のバプテスマフォント。1830年、バプテスマのヨハネは、ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリに神権の権能を授けた。(教義と聖約13章参照)それにより、死すべき人間は再びキリストの救いの計画にかかわる儀式を執り行なえるようになった。□



「食料が 得られますように」

ワナ・リディア・カムボス・モリーナ

3 人の子供たちがまだ幼かったころ、我が家は財政危機に陥ったことがありました。いろいろと手を尽くしたのですが、まったくお金がなくなってしまい、もうどこにも頼る当てなどないように感じていました。そんなある朝のこと、私は家にあった最後の食料で子供たちに朝食を作ってやりました。これでもう昼食を作るにも一滴の油さえありません。やがて夫は仕事に出かけました。せめてその日の食料を買えるだけのお金を得られるように、と願いながら。

こんな試練がなぜ自分に降りかかったのだろう、と私は考え始めました。何か悪いことでもしたでしょうか。たとえ私に罪があったとしても、子供たちは何も悪くないはずです。この時、自分は信仰を使っていなかった、と気づきました。もしも天父がすずめにさえ目を注がれるというのなら、私たち家族のことを放っておかれるはずがありません。私は天父に「食料が得られるよう助けてください」という祈りを捧げました。そして信仰を行使しようという気持ちで、その日の仕事に取りかかりました。

10時ごろになって隣の奥さんが玄関の戸をたたきました。彼女は義理のお母さんがもうすぐ訪ねて来るので、

鶏肉料理や米料理、そのほかいろいろなごちそうを用意したことをひとしきり話しました。やがてもう来るころだからと言って家に戻りました。

しばらくすると彼女はまたやって来て、予定が変更になったと言いました。結局、お客さんは来ないことになって、代わりに、彼女の家族が2週間の休暇を取って義理のお母さんとともに出かけることになった、というのです。そうすると、ある問題が持ち上がりました。彼女が用意したごちそうはどうしたらよいのでしょうか。彼女は少しためらいがちに、用意したごちそうを引き取ってもらえないかと言ってきました。

我が家の状況は彼女には何も言っていませんでした。私は「ご心配なく。喜んでいただくわ」と答えました。これが祈りの答えだと私にはわかっていました。奥さんはほっとした表情で、こう付け加えました。「それから、冷蔵庫の食べ物もお宅で引き取っていただけないかしら。しばらく留守をするのでみんなだめになっちゃうから。」

夫は帰って来ましたが、その日もやはり収入を得られませんでした。にもかかわらず、私たち家族はおなかいっぱい食べることができました。おまけに冷蔵庫まで、食料でいっぱいだったのです。□

突 然見知らぬ女の子たちが12人も
ダーリン・ホーキンスの寝室の
ドアの前に現われました。この子たち
は全員末日聖徒で、ダーリンと同じ年
ごろのようです。とびきりの笑顔で、
手にはクッキーのお皿を持っています。

「来週の日曜日、教会に来ない？」
とひとりが誘うと皆がうなずき、また
笑顔が広がります。

ダーリンはほほえみ返したものの、

いつになったら帰るつもりかしらと考
えています。

でも、女の子たちは帰ろうとしませ
ん。おしゃべりして笑っているうちに、
ダーリンも皆の活気を感じ始めます。
そして、末日聖徒ってこういうものな
のかと思い始めます。「いつもこんな
に楽しいのかしら。お父さんも前は末
日聖徒だったわ。教会のことを話して
くれたことがあったけど……。」

これは1年半前のことです。今では
14歳のダーリン・ホーキンスは教会員
となっています。ダーリンは、同じく
14歳の親友エイミー・バン・キャンプ
とエリカ・エグリーと一緒に、イリノ
イ州ガーニーにあるエイミーの家でソ
ファに腰かけ、自分のバプテスマまで
の出来事を思い出しています。

「あれは家族でここに引っ越したば
かりの時で、まだ親しい友達がひとり

三部合唱

エイドリアン・ゴスティック

PHOTOGRAPHY BY THE AUTHOR AND HELEN D. SHOBAT



もないころでした」とダーリンは言います。「そんな時突然あの子たちがやって来て私を教会に誘ったんです。エイミーとエリカとは学校の吹奏楽部で一緒なので名前は知っていました。……

でもお互いに好感を持っていたわけ

ではありませんでした」とエリカがほほえみながら言います。3人はそろって笑いました。

「そう。仲良しだったわけじゃないんです」とダーリンも言います。「それに、初めは教会に来るよう押し付けられているようにも感じました。」

エイミーは、確かに押し付けがましかったかもしれないと認めます。しか

し、彼女も言うように、友達に教会を紹介する決まった方法などないのです。ですからときには間違いを犯すこともあります。「ダーリンのお父さんが昔教会に集っていたと聞き、エリカと私は、ダーリンが教会を必要としているような気がしたんです。教会の標準はとても高いけど、つらいときにはそれが助けになりますから。」

ダーリンはエイミー（左）とエリカ（右）が友達の輪に加えてくれたことがきっかけとなり、福音を見いだした。



テンポを緩める

エリカとエイミーは、ダーリンが少しプレッシャーを感じているのに気づいて、働きかけのテンポを緩めました。でもふたりは、吹奏楽の演奏旅行でダーリンと仲良くなり、モルモン経をプレゼントし（ダーリンは夏の間にいくらか読みました）、彼女を教会の活動に誘いました。（そのおかげでダーリンはほかの会員とも親しくなれました）そのうち、エイミーとエリカは、勇気を出してダーリンに、宣教師に家へ来てほしいか尋ねることができまし

た。

ダーリンにこの重大な質問をするには相当の勇気がいった、とエリカは言います。「恐れに打ち勝たなくちゃいけなかったんです。私たちはダーリンに断われたらどうしようと心配でした。私たちは教会をととても大切に思っているのです、もしそうになったらほんとうにがっかりしてしまうだろうって。それに、ダーリンがレッスンをばかにしたり、退屈に感じたりするんじゃないかと心配でした。」

でもダーリンは、「はい」と言ったのです。彼女は言います。「宣教師た

ちの話すべてに興味をそそられました。宣教師たちはわかりやすく、そして楽しく教えてくれました。また、レッスンのたびに泣きそうになりました。そしてある日のレッスンで宣教師たちか

友達を教会に導く仲立ちとなるのはすばらしい経験である。この3人の若い女性に、そのためにいちばん大事なのは何か尋ねてみよう。「友達でいること」と答えてくれるだろう。

下——（左から）エリカとエイミー、そしてダーリン。



ら、聖典を読み、深く考え、祈るよう
に言われたんです。その晩、私は言わ
れたとおりにしてみました。すると、
みたまを感じたんです。とってもすて
きな経験でした。涙がこぼれ、この教
会が真実だってわかりました。」

ダーリンの両親は、彼女が教会の教
えを熱心に学んでいるのを見守って
いました。そして、ダーリンがバプテ
スマを受けたいと言いだした時、喜んで
許可してくれました。

よい指揮

友達に教会について話すとき、こう
しなければならぬという規則はあり
ませんが、犯しやすい過ちがひとつあ
ります。それは、今度友達を教会の活
動に連れて行くためならしかたないと
考えて、その友達と行くべきでない場
所に行ったり、よくない行動を取った
りすることです。

ダーリンも、「それはあまりいい考
え方じゃないわ」と言っています。
「前は、たばこやお酒を含め、なんでも
試してみたいと思っていました。エイ
ミーとエリカと知り合ったのはそんな
時です。このふたりが強い信仰を持
っているのをすばらしいと感じまし
た。そして自分もふたりに備わって
いる特質を身につけたいと思ったん
です。もし、ふたりが私のまねをして、
そのころ私がしたいと思っていたこと
を一緒にやってしていたら、私たちは
きっと、今ほど仲良しにはなってい
なかつたでしょう。」

すばらしい結果

それに、もしエリカとエイミーが
ダーリンに模範を示していなかった
なら、後に続くすばらしい結果を目に
することはできなかったでしょう。エリ

カは言います。「一生忘れません…
…」そしてエイミーが言い添えます。
「ダーリンのバプテスマね！」

「ダーリンがバプテスマを受けるの
を見た時、最高の気分でした。彼女が
真理を見つける手助けができたのです
から」とエリカが続けます。「ダー
リンが喜びに包まれているのが伝わ

きました。バプテスマを終え、服を着
替えて出てきた時、彼女はこう言っ
たんですよ。『私は完全だけど、あなた
たちはそうじゃないわ』って。」

「冗談よ」とダーリンは言います。

3人はまたそろって笑いました。そ
れは完全なハーモニーの三部合唱の
ようでした。□

友達に教会について話す方法

お そらく皆さんは、福音に興味を
持ちそうな人をだれか知っている
ことでしょう。相手に笑わずに宗
教の話題を持ち出すにはどうしたらよ
いでしょうか。いくつか簡単なアイ
デアを紹介しましょう。

1. まず最初に、友達に福音を紹介
することについて祈ってください。あ
なたには主の助けが必要になります。
それは友達の側にも言えます。

2. 初めにほんとうの友達になりま
しょう。その人とあまり親しくないの
なら、もっと親しくなれるよう努め
てください。そして、時期が適切だ
と感じたら、あなたの信じているこ
とについて簡潔に話すことから始め
るとよいでしょう。

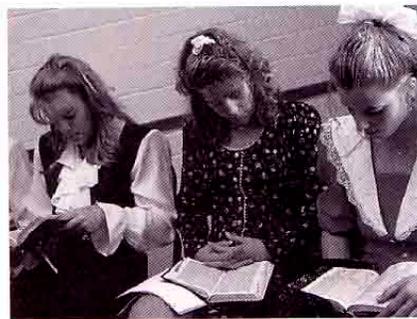
3. 伝道活動はひとりでもなくても
よいことを忘れないでください。も
しほかに末日聖徒の仲間がいれば、
友達を活動に誘いやすいかもしれ
ません。

4. 急ぐあまり、福音を押し付け
たりしないでください。人に教会
への興味を持ってもらうには時間
がかかるかもしれないことを忘
れないでください。

5. たとえ興味を持ってくれな
くても、友達のことをあきらめて
はいけません。その友達がずっと
教会に入らなくても、あなたの模
範を心に留めているかもしれない
のです。

6. 友達に教会に入ってから親し
い友達であり続けましょう。教会
に興味を持つきっかけとなった愛
と友情を一層はぐくみ続けること
が大切です。

□

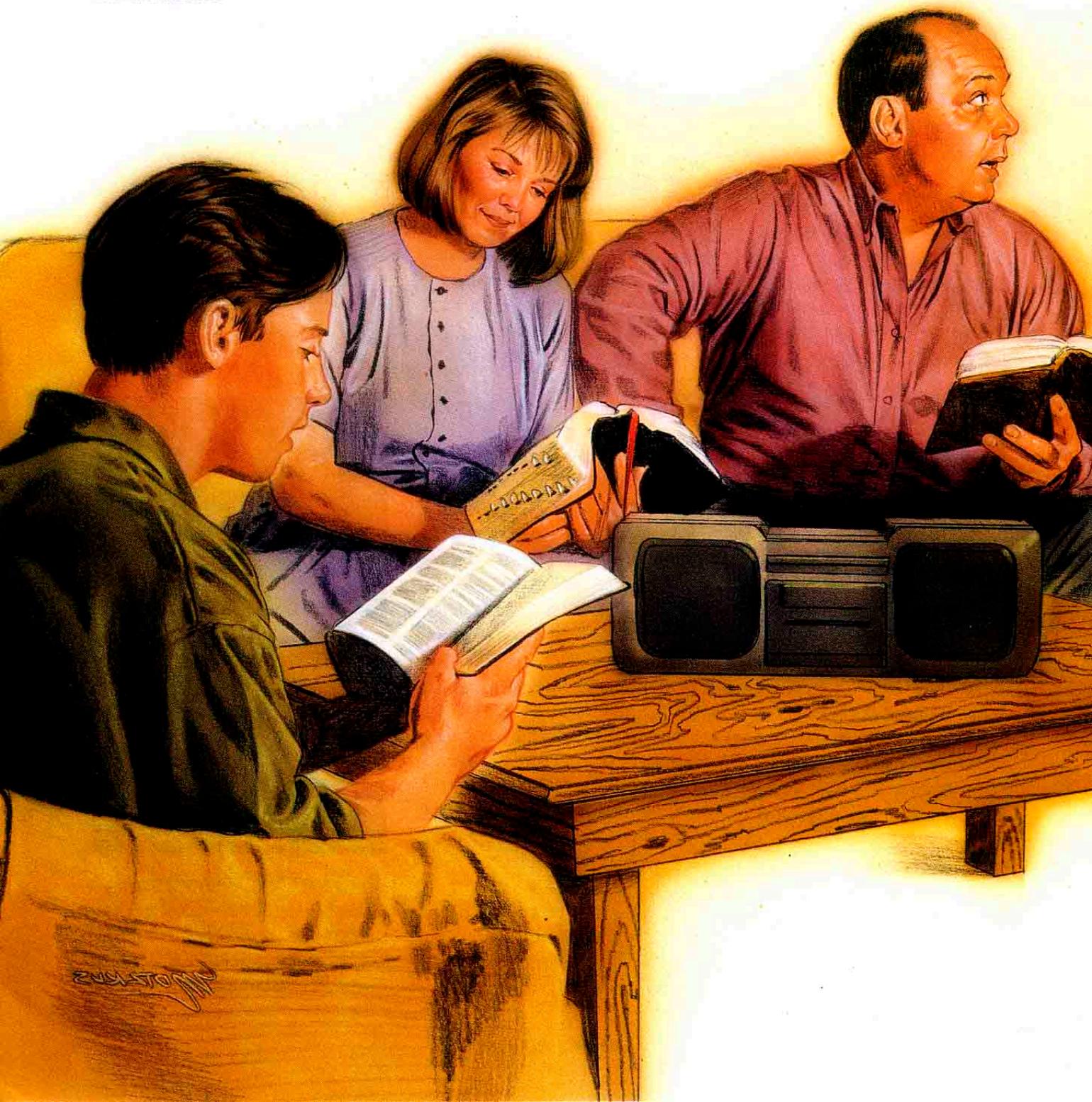


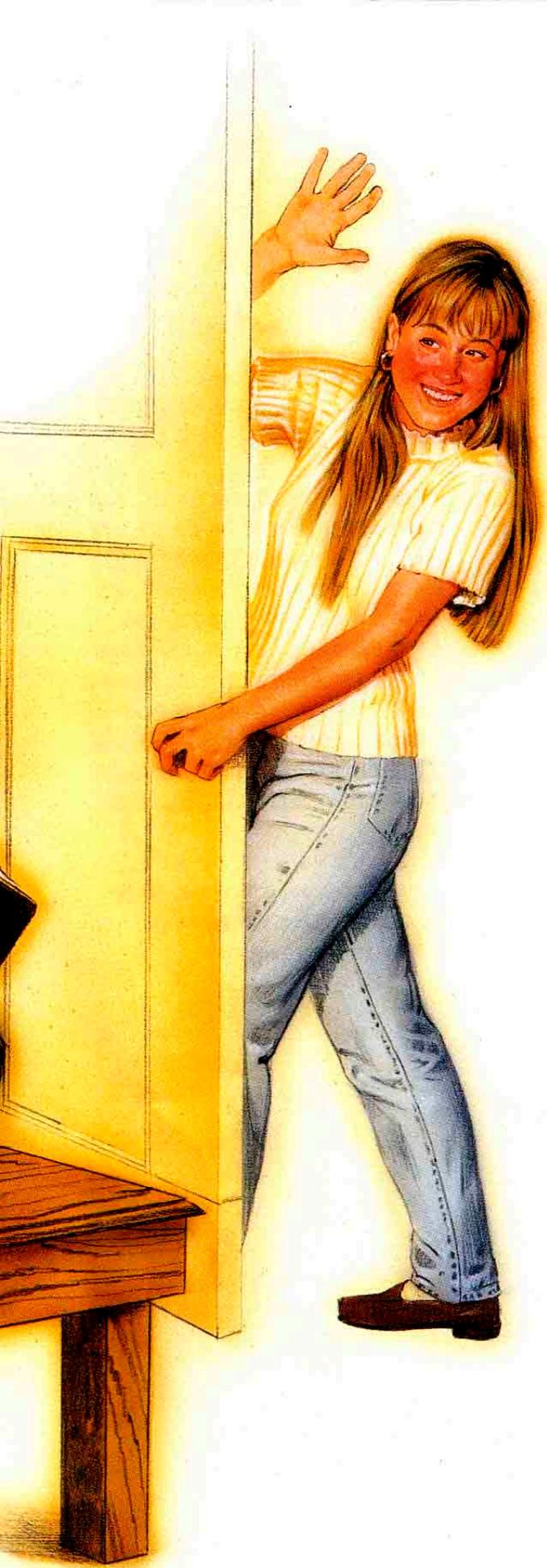
福音を通して3人は友情を深めた。
ダーリンは、エイミーとエリカのよ
い模範を見て、この世的な関心事
から抜け出し、教会についても
っとよく知りたいという願いへ
と導かれた。

我が家の 新約聖書テープ

キャロル・ガーフィールド・シーグミラー

ILLUSTRATED BY ROGER MOTZKUS





高校の最終学年を迎え、私が忙しい毎日を送っていたある日のことです。父が「これからは家族で真剣に聖典を研究しよう」と言いました。兄のブルースが伝道の備えをするのに協力するためです。父は、ブルースが家をたつ前にモルモン経を最後まで読み通すという目標を立てました。しかもテープに声を録音しながらです。当時、7人兄^{きょうだい}妹の中で家に残っていたのはブルースと私のふたりだけでした。父は毎日、学校から帰宅した私たちふたりと母を居間に集めました。皆で聖典を1章ずつ順番に読んでいくためです。

私はこの思いつきに乗り気ではありませんでした。特にテープに録音するというのには閉口していました。そのため私は、ほとんどいつも、聖典を読む時間になると用事や学校の活動に行くからと言っては、内心さぼれるのを喜びながら、家を出ていました。

驚いたことに、家族は数カ月後にはモルモン経を読み終えてしまい、父は早速、別の聖典に取りかかろうとしました。ブルースが伝道に出るまでにはまだ数週間あったので、今度は新約聖書の四福音書を読んで録音しようというのです。今度ばかりは、私は自分の気持ちを父にぶつけました。自分たちのやっていることは無意味であること、プロの人が読んだ聖典のテープが手に入るし、その方が自分たちの録音したものよりずっといいこと、などを話しました。それでも父は考えを変えようとはせず、こう言い張りました。「キャロル、このテープはいつの日かきっと、私たち家族にとって大きな祝福になるよ。」私はそんな父の言葉には心も留めず、協力的でない態度をとり続けました。

何週間かが過ぎ、卒業も真近になってきたので、私が聖典の輪読会をさぼる理由もあまりなくなってきました。ところが、参加する機会が増えるにつれ、私は家族とともに過ごすこの時間が楽しくなってきました。特に、父の語る聖句についての見解を聞くのが好きでした。間もなく私は、聖典を研究することによってもたらされる平安を感じるようになってきました。そして私たちは、ブルースが宣教師訓練センターに入る少し前に四福音書を読み終えることができたのでした。テープをダビングして、1組はブルースに持って行かせ、もう1組は自分たちのために取っておきました。

この我が家だけの聖典テープについて父が話してきたことは、やっぱり正しかったのです。家族にとってほん

とうに祝福となりました。ブルースがいなくなってから、父にとってこのテープがどれだけ大きな慰めとなっているかよくわかりました。父はよくテープを聞いていましたが、ブルースの声を聞きたくてそうしているようにも見えました。父とブルースはとても仲がよかったのです。父は夜、テープを聞きながら眠ってしまうことがあり、テープが終わって機械がカチッ、カチッという音を立てているのを耳にするたび、私はひとりほほえんだものです。

これらのテープはまた、考えもしなかったような形で私に祝福を与えてくれました。ブルースが伝道に出て1年ほどたった時、父は心臓発作で静かに息を引き取りました。9月のよく晴れた日曜日のことでした。外の景色がこんなにも美しいのに、すべてが真っ暗に見えるのはなぜだろうと感じたのをよく覚えています。次の日、最後まで伝道を続ける決心をしたブルースを除いて、家族全員が集まりました。

その日の晩、ともに父を失った兄と電話で話した後、私は悲しみに包まれながら、2階の父の部屋に入りました。失意の中、父の机の前に腰掛けていると、近くに父が愛用したテープレコーダーが置かれているのに気づきました。中には例の新約聖書のテープが入っていました。おそらく父が、亡くなる前の日に聞いていたのでしょう。私は、父のやさしい声の響きを聞いて心が少しでも平安

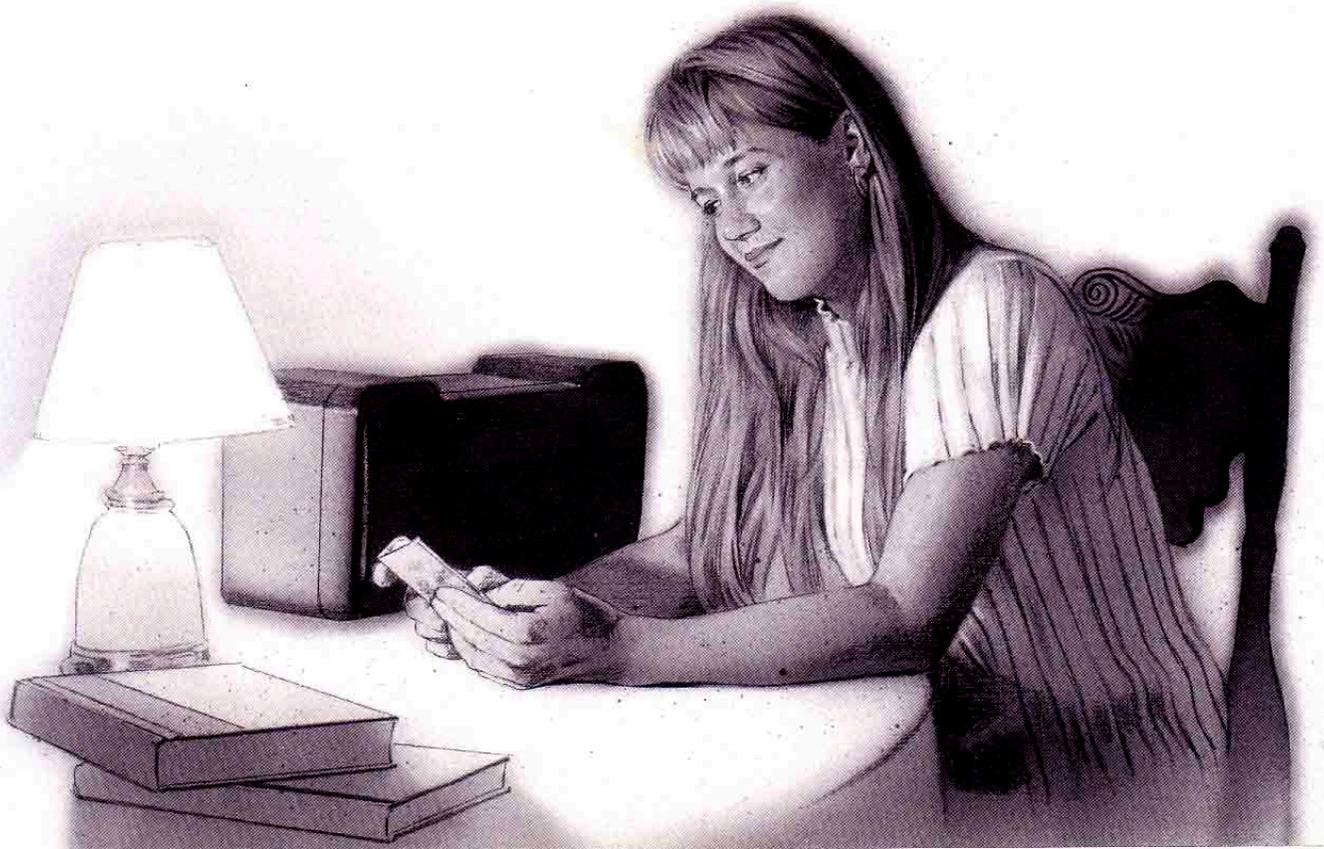
になればと思いながら、テープを巻き戻し、適当な所で止めて聞き始めました。特に言葉には心に留めず聞き流していましたが、急に父が語りかけてきたように感じ、はっとして座り直しました。

「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。

『わたしは去って行くが、またあなたがたのところに帰って来る』と、わたしが言ったのを、あなたがたは聞いている。もしわたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるであろう。父がわたしより大きいからであるからである。」(ヨハネ14:27-28)

私は同じ箇所を何度も繰り返して聞きました。その言葉は私をやさしく包み込んでくれるようでした。私は涙を流しながらも、聖書からその聖句を探して印をつけ、下に降りて行って母に読んで聞かせました。私たちが悲しみに暮れていても、父は平安を感じており、また、自分の愛する家族にも平安を得てほしいと望んでいることに気づきました。

こうしてその夜、私たちは平安を与えられました。それは父の死後、何カ月もの間、静かに私たちの心を満たし続けました。その時以来、私は新約聖書から得られる温かな平安を味わうようになりました。□





「キリストと教師たち」 ハインリッヒ・ホフマン画

マリヤとヨセフは、エルサレムに上った帰り、イエスが親族や知人の中にいないことに気づき、都へ引き返した。
「三日の後に、イエスが宮の中で教師たちのまん中にすわって、彼らの話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。
聞く人々はみな、イエスの賢さやその答に驚嘆していた。」(ルカ 2 : 46-47)



主の使徒は1925年、アルゼンチン、ブエノスアイレスにある公園のひっそりとした場所を選んで、南アメリカ大陸全土を奉獻する祈りを捧げた。今日この公園は、奉獻の祈りの祝福を享受する地元のセミナーの生徒たちにとって、証会あかしかいの場となっている。
 (本誌「アルゼンチンに広がる福音の波」p.10参照)

再組織された大阪ステーキ部長会

昨年9月4日、アジア北地域会長会会長デビッド・E・ソレンセン長老管理の下に開催された大阪ステーキ部大会で、1992年6月よりステーキ部長の責任を果たしてきた長濱俊生兄弟が解任され、新たに河野達廣兄弟が召された。第一副ステーキ部長には佐藤儀正兄弟(写真左)が、第二副ステーキ部長には、小村明兄弟(写真右)が召され、その任に当たる。



主は私を導き祝福してくださいました

大阪ステーキ部長 河野達廣

「一度教会へ行ってみませんか」

私が初めてこの教会を知りましたのは、1981年4月のことでした。当時独身だった私は、仕事を終えた後、よくひとりで夕食に立ち寄る小さな焼肉屋がありました。その店はあるご夫婦が経営しており、私は行くとたびにそのご夫婦といろいろなことについて話をしていました。また常連のお客さんの中に、名前の上に「兄弟、姉妹」と付けて呼び合っている、なんとなく温かい雰囲気の人たちがいました。私は、その時少しおかしかったことを覚えています。

そんなある日、私はいつもの焼肉屋に立ち寄り、食事をしながら店の奥さんの新本さんと、結婚や人生についてあれこれ話をしていました。すると新本さんから「河野さん、今度私の集っている教会へ行ってみませんか」と誘われました。私はちょっと戸惑いましたが行くことにしました。

後日、私は新本姉妹と待ち合わせて、堺の教会へ行きました。そこでは、「モルモン経ファイヤサイド」を行

なっていました。約20人くらいの会員や宣教師がおり、私はとても楽しい時間を過ごしました。その時に数冊のパンフレットを頂き、帰りはとても体の大きいテル長老と、大阪弁の上手なアーチ長老も一緒に帰りました。アパートへ帰り、私は早速頂いたパンフレットのジョセフ・スミスの証を読みました。今思うと不思議なことですが、その時、私はジョセフ・スミスが神様にまみえたことを何の疑いもなく信じることができましたのです。

数日が過ぎて、新本ご家族に会うと「どうでしたか」と聞かれ、「とてもよかった」と答えました。すると「宣教師の話聞いてみませんか」と問われたので、「聞いてみたい」と私は返事をし「帰りの電車で一緒だったテル長老から福音について聞いてみたい」と伝えました。

その翌日から、福音を学ぶために宣教師と会う日々が続きました。最初はふたりの宣教師が、2回目からは帰還宣教師の伊藤兄弟も参加してくれました。テル長老におもにレッスンしていただきました。長老は、まだ日本

へ来たばかりで、日本語をあまり話せませんでした。それでもほんとうに真剣でした。ある時は、ひと言を話すのに2、3分かかることもありました。

宣教師との勉強も進むにつれ、戒め、特に安息日について悩むことになりました。バプテスマを受けたいのですが、その当時は仕事が火曜日休みでしたので、バプテスマを受けても日曜日に教会に行けないからです。そのことについて、どうしたらよいかよく祈りました。宣教師たちも祈ってくださいました。

数日後、うどん屋で仕事をしていると(当時私は、障害を持つ弟の将来の面倒を見たいという気持ちで独立を考え、うどん屋で働いていました)、窓ガラス越しにノックをする人がいます。現在勤めている自動車工作所の経営者の奥さんでした。話を聞いてみると工場長が辞めるので、その後任にとのことでした。決心するのに時間はかかりませんでした。思いがけない祈りの答えがストレートに返ってきて、私はこんなにも明確な解決方法があるのかと驚きました。祈りがこたえられ、宣教師やお世話してくださった会員のかたがたもともに喜んでくださり、感謝の気持ちで胸がいっぱいでした。

安息日を守れるようになり、退職も円満に進み、晴れて1981年6月26日、テル長老からバプテスマを受けること

主の方法を 10年間、子供たち

名古屋西ステーク部御器所ワード部
堀田幸子

我が家には4人の子供がいます。長女が中学3年でセミナーを始めてから、4人目の息子がセミナーを修了するまで、10年間かかり、昨年の3月にその10年間が終わりました。セミナーと呼んでいるプログラムは、中学3年生から高校3年生までの4年間に、4つの聖典から福音の原則と教義を学ぶ教会の教育プログラムのことです。

最初は、日本では「家庭学習セミナー」しかありませんでしたから、長女は週1回クラスに出かけて、あとは教材を家で学習していました。しかし「早朝セミナー」が導入されてから、子供たちは早朝セミナーに出席するようになりました。後半6年間は早朝セミナーでした。

朝は眠くてなかなか起きられない年代の子供たちが、4月から11月の間、毎週月曜日から金曜日までの5日間、6時から約1時間のクラスに出席するのです。朝早く起きるには、夜早く寝さえすればよいのですから、論理的にはどうということはないはずですが、ところが、中学3年生から高校3年生までの4年間には、2回の受験期があるのです。学校から課題が出されることもあり、テストの日もあり、部活動もあり、受験勉強もあつたりで、そう早く寝るわけにはいかないことが多いのです。それだけでなく、今は世の中全体が夜遅く寝るような生活パターンになっていることもあると思います。ですから、毎日朝早く起きるといことは、なかなか大変なことでした。

子供たちは、早朝セミナーに出席すると決心していますから、なんとしても起きる意志があるのですが、その意志に反して肉体は休息と睡眠を求めているわけです。目覚まし時計が鳴っ

ができました。堺ワード部の兄弟姉妹が私のためにたくさん出席してくださってとても感激しました。生まれ変わって神の王国の門に入ることができたのは、ほんとうに奇跡だと思いました。すばらしい会員のかたがたとともに教会に集えることを、うれしく思いました。

テル長老は、アメリカへ帰還する時に「河野兄弟、あの時は、あまり上手に教えることができなくてごめんなさい」と言われました。私は、テル長老が異国の地で伝道するために大変な努力をし、言葉を覚え、2年間私たちのために働いてくださったことを思うと、思わず胸が熱くなって涙が出てしかたありませんでした。ほんとうに感謝しています。

「主の召し」

バプテスマから数年が過ぎ、長老定員会会長として召された時に、当時の大下監督が「毎朝、静かな場所で必要なことを主に祈りなさい」と言われたことを思い出します。

大下監督は、私にとってすばらしい模範でした。その後、私は監督に召され、どのようにその責任を果たしたらよいか悩んだ時期がありました。それまでもよく祈りましたが、特にその日は長い時間、ワード部会員一人一人のことについて祈りました。

その日の朝方、主の声が聞こえたの

を今でもよく覚えています。静かな、それでいて張りりと威厳のある声でした。「すべての人に対して、また信仰ある家族に対して汝の腹中を慈愛にあふれしむべし。絶えず徳を以て汝の想を飾るべし。然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強くなりて、神権の教理は天より下る露の如くに汝をうるおさん。」(教義と聖約121:45)

私は、その経験により天父と御子が実在されていることを再び確信しました。また責任を受けて主に忠実に働く時に、家族が守られ、教会の責任とともに仕事にも恵まれ、祝福されていることを感謝しています。

またこのたびステーク部長の責任に召され、すばらしい助け手として佐藤儀正、小村明両副ステーク部長とともに働けることを感謝しています。そして、大阪ステーク部のそれぞれの役員、また彼らを励まし助けてくださるご家族のかたがた、そして会員一人一人の献身的な働きと祈りに心より感謝いたします。私たち(会員)の愛ある働きの歩みが増し加わり速くなり、ひとりでも多くの会員のかたがたとともに楽しいシオンの建設に携わり、喜びを得たいと心より願っています。ハワード・W・ハンター大管長が現在の神様の生ける予言者であることを証いたします。末日聖徒イエス・キリスト教会が真実の教会であり、主は私たちを幸福へと導かれることを証いたします。(かわの・たつひろ)

河野達廣ステーク部長ご家族



河野達廣ステーク部長 の紹介

1949年宮崎県生まれ。都農町立中学校卒。31歳でバプテスマを受ける。1983年、中原勝枝姉妹と結婚し、現在4人の子供がいる。大阪ステーク部大阪ワード部所属。自動車整備士。これまで、副ステーク部長、監督、高等評議員、長老定員会会長、活動委員長を歴任している。

妨げてはいけない をセミナーに送り出して

でも起きられないほどぐっすり眠っていることが多いです。それで私は、毎朝遅くとも5時半には起きていて子供を起こすようになりました。まず一度起こし、10分ぐらいしたらもう一度見に行きます。たいてい、また眠っています。

春は張り切っています。夏も明るいし、いいのです。つらいのは夏休みを過ぎて9月からです。学校も忙しくなり、さまざまな行事があり、受験勉強も追い込みに入り、11月になるとだんだん日の出が遅くなります。暗く寒い中、眠い目をこすって、自転車で行く子供たちの様子を見るのは、ほんとうにつらい思いでした。ゆっくり寝かせてやりたいという思いがいつもありました。毎日の疲労が重なって、子供によっては学校では居眠りばかりしている様子でした。

疲労は重なり、高校3年生になるとそれもピークになりました。大学受験で友達は皆受験勉強に集中しているのに、セミナーで疲れて、ほんとうにかわいそうに思いました。受験勉強も友達と対等に競争させてやりたい、どうしてこんなに疲れることをさせるのだろう、健康を害するかもしれないのと思いました。それまで、教会のプログラムはどれも私たちのためにあると思ってきましたが、早朝セミナーだけは好きになれませんでした。

私自身がその年齢だったら、きっと

頑張っって早朝セミナーで学習しただろうとは思いますが、親の立場としては心配なことばかりでした。「家庭学習者は修了者が少ないので、できれば早朝セミナーで学んでください」と指導者より言われ、子供たちはそうすると決めてみじんも動かないのです。私としては毎日ぐっすり寝て学校へ行き、帰ってから教材を学ぶ家庭学習にした方がいいのではないかと勧めました。でもだめでした。自分でこつこつ毎日学習するのはたぶん続かないだろうと考えたのです。私の心配をよそに、主人は頑として動かず「とにかく若いうちにやればいいんだ。だいじょうぶ」の一点張りでした。なんとわからない人だと、私はひとりで怒っていました。

私たちは子供たちが生まれた時から教会に連れて行って教えていますので、「教会で指導者が言われたことはする」ということになっているのです。そのように教えてきましたから、疑いがありません。「早朝セミナーをしましょう」と言われればするのです。どんなにつらくとも、どんなに疲れていてもするのです。ですから、大人である指導者が考えてあげないはいけないと、私は思いました。早朝セミナーには消極的な考え方の親たちも多いと耳にして、その親の気持ちが、私にはよくわかりました。受験期は外してほしいというような意見もあるよう

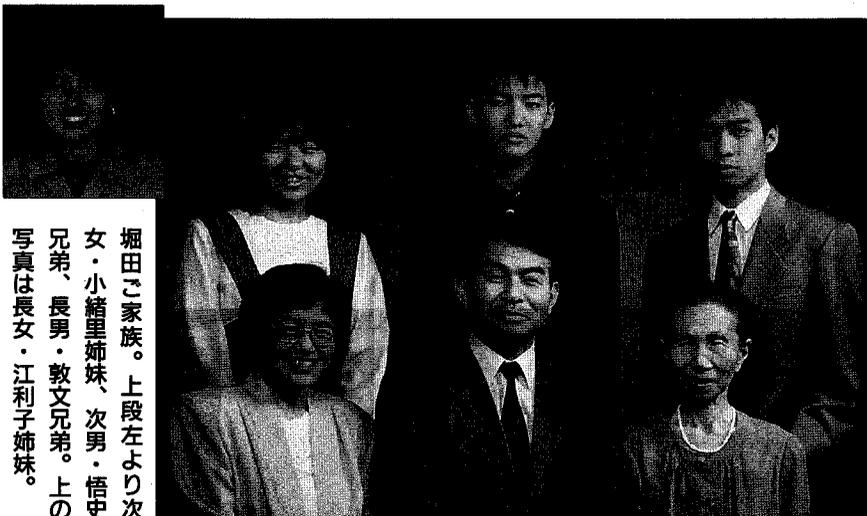
に聞きました。それで、日本の教会教育部の指導者の方が、日本の状態を説明して、教会の本部に尋ねてくださったとも聞いています。

でも、答えはこうでした。眠いのは日本の若者だけでなく、受験があるのも日本だけではなく、忙しいのも、そのほかの事情も日本だけではないということ。そして、その年代（中学3年から高校3年）に、しかも安息日以外の週日に、福音を学ぶことがとても大切なので、ぜひ頑張っってほしいということでした。大管長会が導きを受けた主のプログラムであるというのが答えでした。

毎日、子供を起こし、セミナーに送り出しながら、子供たちの健康をお守りくださるようにと祈りつつも、私はまだ心を悩ませていました。

そのようなある日、私はアブラハムの信仰を思い出しました。私の大好きな、旧約聖書の一場面です。愛する息子イサクを犠牲として捧げるように求められたアブラハムの心を思いました。そして、決心してイサクを犠牲に捧げようとしたアブラハムの信仰を思いました。その時、「それに比べて私はなんだ！」と思いました。「主がおっしゃるのに何を迷っているんだ。病気になんかならない、いや病気になったって、受験に失敗したって、そうよ、たとえ命を取り上げられたっていいじゃない」と思えたのです。すべて主にお任せすればいいと、その日思いました。そして、その日に、私の迷いと悩みはふっ切れました。もう悩まないことに決めました。主は、私以上に子供たちを愛してくださっている。私は単に預かっているにすぎないのに、私の浅はかな考えと情で、主の方法を妨げてはいけないとわかりました。それからは平安になって、毎朝、子供たちを起こし続けました。

私は、我が家の子供たちが中高生の時期に、合わせて6年間、日曜学校の中高生のクラスの教師に召され、また早朝セミナーの教師としても、2年間責任を頂きましたから、4人の子供たちに自分でも直接教える機会がありました。自分の理解したままに、福音の原則を教えることができ、自分の証



堀田ご家族。上段左より次女・小緒里姉妹、次男・悟史兄弟、長男・敦文兄弟。上の写真は長女・江利子姉妹。

も、よく伝えることができ感謝しています。子供たち4人が高校を卒業して、ほんとうによくわかったことは、あの年代がセミナーのプログラムを通じて福音を学び、自分の証を築き上げるうえで、どれほど大切な時期だったかということです。その時期に子供たちは自分で証を得て、真に改宗し始めるのを、私ははっきり知りました。

そして、セミナーのプログラムで信仰を試されるのは親だということもわかりました。恐れずに、子供に犠牲を払わせることが大切だったのです。自分でしてみなければ子供はわからないし、証を得ることができないからです。それをできるように助け、支えるのが親の責任と思います。

4番目の子供はセミナーの始まる最初の日に、「早朝セミナーで4年間、無遅刻皆勤」という目標を立てました。私が起こすと、どんなに眠くてもぱっと起きました。頭は眠っていても、体は反射的に起き上がるのです。

最初の1年間に、39度以上の熱を出した日が3回くらいありました。彼の決心は、4年間無遅刻皆勤ですから、なんとか助けたいのです。4時半に起きて、寝ている彼の熱を計りますと、39度2分です。それで、体を支えて起こし、薬を飲ませました。5時半にもう一度熱を計りますと、38度5分になっています。耳元で「セミナー行くの?」と尋ねますと「うん、行く」と言います。それで、暖かくさせ車で送りました。熱があることはおくびにも出さず、レッスンに参加して帰り、そして学校は休みました。どの子も、学校は休んでも、セミナーには行くという頑固さでした。言うまでもなく、別にそんなにしてまで行かなくてもいいのです。でも、本人がそうしたいと言うのですから、私は助けたいと思いました。もう迷わないことに決めていましたから。

もし、4年間のセミナーの期間に、病気で入院すると、どうしても欠席しなければなりませんから、入院するのなら、その期間でないようにと、3番目の娘は祈っていました。その娘も4年間皆勤の目標を果たし、4番目の息子も、4年間の最初の日に決めた目標

を達成することができました。それには、本人たちの努力だけでなく、主のみ助けがあったことを知っています。

10年間のセミナーが終わって、とてもうれしく思いました。苦しかったので、そして頑張ったので、その喜びもひとしおでした。その間の高校合格より大学合格より、聖句探しの優勝より、私にとって何よりうれしいのは、その過程で子供が自分自身で証を得たことです。これよりうれしいことはありません。み言葉は行なって初めて初めて真実とわかるという証を、子供自身が得たのです。やってみなければ、い

つまでもわからないし、つらいことを避けて歩く人生では、いつまでも主のことはわからないと思います。やる時には必ず苦しみと犠牲、努力が、それもときには並々ならぬものが必要だと思います。でも、やってみたときに、涙とともに真実とわかるのです。

セミナープログラムで熱心に学ぶかたがたには、必ずみ守りがあって、証という、ほかのものに代えがたい祝福がいただけることを、心から証したいと思います。(ほった・さちこ ステーク部扶助協会会長)

自分で実行してみて

4年間無遅刻無欠席の早朝セミナー

名古屋西ステーク部御器所ワード部
堀田悟史

ぼくは4年間の「早朝セミナー」を、とうとう無事に修了することができました。このセミナーの中で、努力や忍耐、聖典を学ぶこと、それを継続することの大切さ、聖句の意味など多くの事柄を学びました。でも、それらの中でいちばん強く感じたのは、戒めは自分で実行してみれば初めて真実だとわかるということです。

ヨハネによる福音書第7章17節に「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」とありますが、ほんとうにそうだと身をもって感じました。

4年前にセミナーを始めるに当たって、ぼくはひとつの決心をしました。それは、「早朝セミナー」で4年間1日も休まず、遅刻しないという決心でした。この目標の根底にあったものは「褒美を得るために勉め励むのは必要なことである」(モーサヤ4:27)と「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ7:7)のふたつの聖句でした。そして今までやってきて、このふたつの聖句の意味がわ

かりました。

最初の聖句では、初めは「褒美」を求めていましたが、セミナーの勉強を続けるうちに、自分の得たものが「褒美」よりもはるかに大きいことに気づきました。つまり「褒美」を最後に得ることそのものがすばらしいのではなく、動機は何であろうと「勉め励む」ということがすばらしいのだとわかりました。

ふたつ目の聖句では、その求めるものが神様のみこころにならなければ、どんなものであろうと与えられるということがわかりました。もしよいことを求めているのに与えられなかったという人がいても、自分の信仰が薄いからだとか思わないでください。それには必ず何か理由があり、最後にはよかつたと思う時が必ずきます。

神様のみこころはときには人間には理解できない場合もあります。しかし結果がどうであれ、自分に対してどれだけ努力したかによって神様は判断されます。人間からもらう褒美はときには不公平なことがあっても、神様からもらう褒美は絶対に公平です。このことをしっかりと心に留め、これからも頑張っていきたいと思います。(ほった・さとし ワード部日曜学校13コース教師)

夫婦宣教師の証

日本での2度目の伝道

伝道地で迎えた40回目の結婚記念日

大阪伝道部夫婦宣教師
キース・M・マンク

1993年初め、ユタ州ローガンの我が家に東京から電話がかかってきました。当時、アジア北地域会長会長のW・ユージン・ハンセン長老からでした。私は、第二次世界大戦後に日本で伝道部が再開された時に働いた宣教師の名前と現住所を載せた名簿を持っていました。ハンセン会長はデニス・アトキン長老からそのことを聞き、その名簿の写しが欲しいと言ってこられました。

名簿には、エドワード・L・クリソード伝道部長やヴァイナル・G・マース伝道部長の下で1948年から1953年までに働いた宣教師のほとんどの名前が載っています。でも中には住所不明のものもあります。私は折々新しい住所や名前をコンピューターに入力していました。ハンセン会長から電話を受けてからは、情報を追加し充実させるよう一層努めました。私の名簿に載っている名前の中には、それほど多くはありませんが住所のないものがあります。そのうちいくつかの空白には、「天、神の御国」と書き込むべきなのかもしれません。彼らはすでに世を去ってしまったのです。私は、その名簿の写しをハンセン会長に送付しました。

なぜ自分がこの名簿を作成しようと思うようになったのか、今でもわかりません。その名簿は、総大会の時期にソルトレークシティで開かれるリユニオン（同じころ伝道した人たちの集い）について、帰還宣教師たちに通知するために使われていただけでした。

私たちは長年、継続的に会合を開いていました。マシュー・カウリー長老が、亡くなる少し前にこの集いに来てくれたこともありました。ある年には、クリソード伝道部長とマース伝道部長のふたりを迎えて特別な会が開かれました。その時、クリソード伝道部長は、現在東京神殿の建っている、元伝道本部の敷地を教会が入手したいきさつを話してくれました。その話はテープに録音され、ユタ州ローガンの自宅に今も保管されています。1993年4月には、ハンセン会長が出席してくださいました。クリソード姉妹は今でもこの集いに出席しています。それにしても、この名簿にはほかにも大切な目的がある

ように思われました。

◆再び日本の地へ

やがて、ハンセン会長から、私たち夫婦の状況と、妻を連れてもう一度日本の地に戻ることに関心があるかどうかを尋ねられました。私たち帰還宣教師グループから、日本の10の伝道部へ夫婦宣教師を送りたいというのです。私はハンセン会長に、妻は耳が不自由であることを説明しました。数年前に外科手術を受け、内耳に「人工内耳」と呼ばれる装置をはめ込んでいました。今では聞こえることは聞こえますが、よりよく理解するためには、さらに相手の唇の動きを読む必要があります。



マンク長老ご夫妻

とにかく私たちは伝道に出られるか検討してみることにしました。

人工内耳には、サウンドプロセッサ（音調の処理装置）、オーディトリケーブル（フックとマイクをつなぐケーブル）、イヤフックマイクロホン（集音部）などの外部装置が必要です。これらの装置はときどき調整しなければなりません。妻は予備のオーディトリケーブルとイヤフックマイクロホンは持っています。しかし、1万5,000ドル（1984年当時）もするサウンドプロセッサは持っていませんでした。もし、もう1個サウンドプロセッサがあれば、どこかが故障しても、それを修理に出している間、不自由しないで済みます。

ローガンに住んでいる時これらの装置に問題が起きると、私たちはすぐに82マイル（130キロ）離れたユタ大学医療センターへ行き、修理してもらわなければなりません。この新しい医療処置と装置に関して重要な働きをするのは、オーディオロジスト（聴力調整士）です。この装置について専門の訓練を受けた技師は日本にはいません。こうした状況の下で遠く離れた外国に行くのは、彼女にとってあまり魅力あることではありませんでした。私はこのような考えが浮かびました。「もう使われていない中古のサウンドプロセッサがどこかにないだろうか」と。しかしそれから2日とたたないうちに、私たちは友人からもうひとつのサウンドプロセッサを手に入れることができました。しかも、無料です。それからというもの、妻はとても元気になりました。みたまが彼女に働きかけているのがわかりました。それまで彼女は日本へ行くことについて決して「行きたくない」とは言いませんでした。ただ「行きたい」とも言いませんでした。しかし、あのような不思議な方法でサウンドプロセッサを入手してからは、どの道を進むべきかについて私たちの心に何の迷いもありませんでした。主が私たちと周りの人々を祝福し、導かれたのです。その後、私たちは監督から面接を受け、主が私たちを召される所へ喜んで行くことを示す書類を作成し、提出しました。

さらに彼女の装置の調整をしている会社の人がこう申し出てくれました。「ご出発前に、あなたの装置をよく検査いたしましょう。」予備のサウンドプロセッサについても、彼女の聴力に合わせて検査調整してくれました。

◆大阪伝道部への召し

大阪伝道部への召しが来ました。以前私が伝道した地域に大阪は入っていませんでした。1950年、私はまず東京の荻窪で伝道しました。それから北海道の札幌、小樽、室蘭に赴任しました。私とハワイ出身の金網英雄長老は室蘭で伝道した最初の宣教師でした。それから福岡へ行き、次に石川県の金沢と小松へ行きました。3年間の伝道が終わると、ユタ州のガニソンにある自宅に戻りました。

しかし、私には大阪とひとつかかわりがありました。日本で最初の晩を過ごしたのが大阪だったのです。伝道に出る5年前、私は合衆国陸軍にいました。第二次世界大戦が終結した10日後、私を乗せた軍の船は機雷の仕掛けられていない航路を経由して、和歌山県の田辺沖を通りました。私は田辺と大阪の間のどこかで船を降り、何キロか歩き、まだ走ることでできる列車に乗り、大阪まで行きました。その最初の晩は、焼け落ちた建物のコンクリートの床に寝ました。それはカトリック教会が運営する学校だったそうです。コンクリートの骨組みだけが残り、そのほかはすべて焼失していました。それは2階か3階建ての建物でした。その地域ではほかの建物もみな、全焼していました。コンクリートの土台だけが家のあった場所を示していました。住宅の焼け跡から集められた、がれきや残骸が山積みになっていました。このたぐさんの山には、棒切れのような細長い板が立てられており、その板には文字が書いてありました。そこで亡くなった方の名前だということでした。

大阪に滞在したのは、ひと晩だけでした。翌朝、私たちは大阪発姫路行きの列車に乗りましたが、真夜中になっても到着しませんでした。そのような短距離にしては、時間がかかりすぎました。振り返ってみると、当時の交通

機関は戦争の被害もたらした最悪の状況にあったのです。「あの時乗った列車の機関士や彼の家族に会えたらなあ」という思いが今も心に浮かびます。過ぎ去った日々を話し、彼らに福音を伝えたいのです。

◆田辺で40回目の結婚記念日

マンク姉妹とともに大阪に着いた後、初めての伝道地、田辺へやって来ました。1年たちましたが、私たちはまだ同じ所にいます。ここは「みかん天国」で、私たちはここでみかんのシーズンを2回過ごすことになります。私たちはここが気に入っており、この人々が大好きです。この地の会員たちはすばらしい模範を示してくれます。

妻は支部の伴奏者をしています。彼女は、まだ耳が聞こえる若いころにピアノを習いました。今はオクターブの違いはわかりますが、ひとつの音符と次の音符、たとえば「シ」と「ド」が聞き分けられません。ですから暗譜して弾いているのです。もし音を間違っても本人にはわかりません。しかし、支部の会員たちはとても思いやりがあり、理解を示してくれます。ここにすばらしい会員がいるおかげで、彼女はとてもうまくやっています。

妻は、私が1946年に銀座で買った日本製の絹で、自分のウエディングドレスを作りました。私たちは昨年5月にここ田辺で、40回目の結婚記念日を祝いました。子供たちも孫たちもいない、静かな記念日でした。私たちには息子と娘がふたりずついます。孫は8人おり、そのうち7人は健在ですが、マリーは天に召されました。きっと私たちのために道を備えてくれているでしょう。

私たちは天父と私たちの救い主、イエス・キリストを愛しています。日本に滞在し、私たちの証を日本人に伝えることができることを特権だと感じています。天父は生きておいでになります。私たちの救い主イエス・キリストも生きていらっしゃいます。私たちは、地上のすべての人々がこの知識を得るという祝福にあずかり、それに従って生活できるよう願っています。（ローガン・ユタ第18ワード部出身）

東京東ステークス支部市原支部



「Jリーグの町で」

主は私たちが必要とするものをご存じです

東京東ステークス支部市原支部 反田隆文

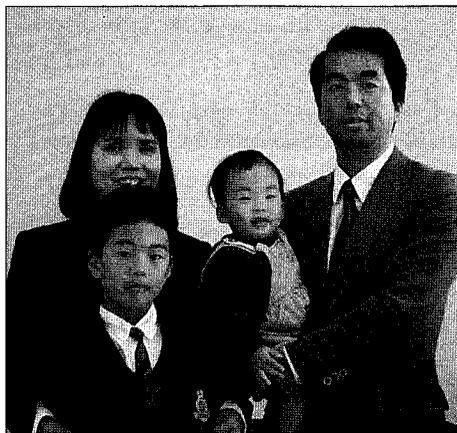
「オーレー、オレ、オレ、オレ。」
きょうも教会の近くの市原臨海
競技場から元気なJリーグ(日本プロ
サッカーリーグ)の応援の声が響いて
きます。昨年3月、このJリーグの町、
市原市に市原支部が設立されました。
支部設立の原動力になったのが、この
Jリーグにあふれているのと同じ活気
と熱気でした。

千葉県市原市。私たちの家族が転勤
で、この房総半島の内側にある人口約
28万の市原市の近くにある君津市に
引っ越して来たのは、今から6年ほど
前でした。そのころは、東京湾横断道
路の工事もいよいよ開始され、だんだ
ん活気を帯び始めてはいましたが、ま
だまだ千葉市より南には人々を引きつ
けるようなものもそれほどなく、人口
も少ない所でした。そのため、教会も
千葉県北部に集中し、広い房総半島の
うち、千葉市より南にはどこを見渡し
ても教会はありませんでした。

この地に住む兄弟姉妹は、数こそ少
ないですがそれぞれに信仰を持ち、こ

の地にいつか教会ができることを信じ
て、いろいろなことを行なっていまし
た。そして、定期的集まっては、食
事会、親睦会、証会などを行なってい
ました。しかし、この地での伝道は
なかなか発展しませんでした。

でも、みんなは、次の聖句を知って
いました。「恐れるな。語りつづけよ、
黙っているな。あなたには、わたしが
ついてる。だれもあなたを襲って、



反田支部長ご家族

危害を加えるようなことはない。この
町には、わたしの民が大ぜいいる。」

(使徒18：9，10)

そして、ちょうどそのころのこと、
近くに住む人でさえよく知らないと言
われたこの町が、全国的に知られるよ
うな出来事が起こったのです。それは、
皆さんもご存じの、空前のブームを巻
き起こしたJリーグでした。Jリーグ
の1チーム「ジェフ」がこの市原市を
ホームタウン(本拠地)に決めたので
す。そのころから、人々の関心も市原
市に注がれるようになりました。

いつの間にか人口も増え、市原にも
教会ができるのはもうすぐだと感じる
ようになりました。兄弟姉妹たちの長
年の努力も実を結び、前から行なっ
ていた食事会や親睦会を通して私たち
の気持ちも、次第にひとつの支部のよ
うになりました。そうなると思議なも
ので、すばらしい家族が転入してき
たり、都合で今まで来られなかった人
が来られるようになったり、また教会
や福音に興味を持ち、宣教師から福
音を学ぶかたが増えたりしてきました。
そして、とうとう昨年の3月に千葉
ワード部から分割され、このJリー
グの町市原市に待望の支部ができる
ことになったのです。

その後も、多くの神様の導きを受け
ました。今の支部の建物を探していた
時のこと、私たちはひとつのよい物件
を見つけました。Jリーグの試合のた
びに多くの人々が集まり、また市原
市の交通の起点でもある五井駅から歩
いて7、8分ぐらいの場所で、フロア
も広く皆が気に入り、とても喜んで
いました。ところが、申請の手続きを
している間に、2年間も借り手がな
かったという建物をほかの人が借
りてしまったのです。こんなによい
条件の物件はほかにはないと思っ
ていた私たちはがっかりしてしま
いました。どうして神様はここを私
たちに与えてくださらないのだら
うと不満を述べました。すると、
ある人が神様はもっとよい場所を
私たちのために残してくださって
いるのですよと言ってくださいまし
た。そしてその日の夜、聖典を見
ていると次の聖句を見つけました。

「熱心に求め、常に祈りて信ぜよ。

もし汝ら正しく道を歩み、汝らの互いに結びたる誓約を憶えなば、何事も結局は好都合となるべし。」(教義と聖約 90:24)

その聖句を見つけ、熱心に求めればきつともっとよい場所を見いだすことができることと確信しました。

それから、数日後に新しい建物が見つかったとの連絡を受け、すぐに見に行きました。その建物を見て私はびっくりしてしまいました。なぜなら、その建物は駅のロータリーの一角にあるのです。

前の場所よりももっと駅に近く、五井駅から歩いて1分。駅のホームにいる人の顔が見えるほど近かったのです。私たちががっかりしていたら、その建物もすぐにほかの人が借りていただろうと思います。

主はいつも私たちを見ておられ、私たちが必要とするものをご存じなのです。そして、これらの経験から、私たちの^{はかり}で満足していると、もっと大切なものを見逃してしまうことを知りました。神様が与えてくださったチャンスはすぐに行動しないとそれを逃がしてしまうこと、またチャレンジを果たすときに、その祝福はもう一歩先にあることが多いことも知りました。

それから、細谷^{なすけ}佐ステーク部長、青柳弘一地区代表など建築宣教師の経験のある指導者により、支部の兄弟姉妹が一致して、建物の改造に力を注いでくれました。そのおかげで、とても気持ちのよいりっぱな礼拝堂とクラスルームができました。その後、バプテスマも増え、宣教師も増えて、兄弟姉妹たちはますます頑張っています。市原支部は、現在出席者数が40人ほどの支部ですが、すぐに大きなワード部になる日が来ると確信しています。なぜなら、その力を持った人々が今ここにいて、そのために力を注いでくれるからです。

主は必要な時に、必要な人を送ってくださり、必要なものを用意して下さることを知りました。それを手にするかどうかは、それぞれの人の頑張りや主が備えてくださっているものや気づくかどうかにかかっているのだと思います。

私の子供は、きょうも大好きなJリーグの替え歌を歌っています。それは、今の私たちにぴったりの歌だと思っています。「オーレー、オレ、オレ、オーレー、今がチャンス。今がチャンス」(たんだ・たかふみ 支部長)

真実の教会へ 導かれて

東京東ステーク部
市原支部

山庄亜樹



初めて神様とお話したのは小学校1年生のころだったと思います。私の家は、両親が共働きだったこともあって、いつも夜は妹とふたりっきりでした。「寂しい」という気持ちよりも、「妹を守らなくちゃ」という気持ちの方が強く、いつも大人に気を遣っていたように思います。そんな私が、神様のことを信じ、もっとよく知りたいと思うようになったのは、自然なことだったのかもしれませんが、「大好きな友達と、明日も一緒に帰れますように」とか、「おやつケーキがおいしく食べられますように」など、幼いころの祈りは、単純でさいいなものでしたが、ほんとうに純粋で一生懸命でした。そして、願いがかなえられた日の夜はうれしくて、「神様、ありがとう」と何度も繰り返して祈ったことは、今でもはっきりと覚えています。

それから15年ほどたって、ふたりの姉妹宣教師に出会いました。私はこれまで、いつかは自分にぴったりの教会を見つけてバプテスマを受け、ほんとうのクリスチャンになりたいと思っていました。でもたくさんありすぎて、どの教会に入ったらいいのか判断することができませんでした。せめて聖書を読んでみたいという気持ちになり、本屋へ買いに行ったこともあります。でも結局買うことはできませんでした。どの訳の聖書を読んだらいい

のか、やっぱりわからなかったからです。幼いころから読むんだしたら本物の聖書、入るんだしたら真実の教会、と決めていました。家の近くにもいくつかの教会があったのですが、もし間違っていたら、と思うと怖くて行くこともできませんでした。そんな時、宣教師と出会ったのです。伝道の書第3章1節には「すべてのわざには時がある」とあります。私にとって、まさに「その時」がやって来たのです。

当時私は仕事が忙しく、夜10時過ぎまで残業をし、家に帰ると12時近くという毎日を送っていました。しかし偶然にも、宣教師との出会いから2日後にほかの部署への異動が決まりました。そこは残業の一切ない所でした。私は空いた時間で毎日のように教会へ通い、宣教師からお話を聞くことができました。また、初めて「知恵の言葉」の戒めを聞いた時、びっくりしました。ほとんどが守れている状態だったからです。お祈りについて学んだ時、今まで私が小さいころからしていたことが正しかったことを知りました。その時、神様は確かにいらっしゃるということがはっきりとわかりました。そのほかにもほんとうにたくさんのよい偶然が重なって、1カ月後に私はバプテスマを受けました。神様はどうとう私を、真実の教会へと導いてくださったのです。

教会員となってからは、とにかく神様についてもっとよく知りたいという気持ちでいっぱいでした。学ぶことすべてが新鮮で、今までの漠然とした信仰がはっきりと現実のものとなっていき、ますます証が強められました。そしてたくさんの教会員に助けられ励まされながら、楽しく3年間を過ごしてきました。

昨年の3月に市原支部が設立され、私はステーク部の中でいちばん大きなワード部から、いちばん小さな支部へと移って来ました。少し寂しい気持ちもしましたが、これも神様の計画の一部なのだと思えて受け入れることができました。分割する1年も前から、会員の家でたびたび食事会を開いたりして集まっていたせいも、みんなが一致して、とてもアットホームです。支部全体がひとつの家族のように、お

互いを思いやり、助け合い、励まし合っています。このような支部に集う機会を与えてくださった神様に、心から感謝したいと思います。

幼いころから神様は、私のそばにいてくださいました。そして、教会員ではなかった私をも、愛し、助け、励まし、しかってくださいました。取るに足りない小さな私を覚えてくださり、将来、神様とともに住む方法を教えてくださいましたことに、心から感謝しています。また、私を見つけてくれたふたりの宣教師たちに感謝しています。いつも支えてくれている家族に感謝しています。神様は生きていて、いつでも必要なときに私たちを助けてくださっていることを証します。これからも市原支部が、もっともっと元気で素敵な支部になるように、みんなと一緒に頑張っていきたいと思います。(やましよう・あき 支部若い女性第一副会長)

宣教師と一緒に 伝道して

東京東ステーキ部
市原支部

青柳明弘



去年の夏休みの3日間、専任宣教師とともに伝道活動をする青少年のプログラムに初めて参加しました。

宣教師の長老とふたりで家を一軒一軒回る戸別訪問や道行く人々に声をかけ、教会を紹介する街頭伝道をしました。初めて戸別訪問をした時は、どきどきして何をしたらよいかさっぱりわからず、教えるどころか声も出ませんでした。しかし、長老のよいアドバイスを受けて、なんとか頑張ることができました。

勇気を出してベルを鳴らしても、ほとんどの人はまったく聞いてくれませんでした。断われ続けるにつれて、だんだん伝道なんかむなしという気

持ちがわいてきました。しかし、長老たちは何も言わずに、にこにこして伝道をしているのです。私は教会員である両親の元で育ったせい、今まで宣教師と身近に接することが多かったけれど、この時に初めて宣教師の忍耐力と愛の大きさに驚かされました。私たちの話を聞いてくれる人にお会いすると、断われた時の気持ちがすぐに消えてしまい、またすばらしい長老のアドバイスのおかげで楽しく伝道ができました。

現在の市原支部にいる青少年は、4人です。初めて支部に分割されると聞いた時ははっきり言って反対でした。理由は簡単で、青少年の数が減ってしまい、楽しみもなくなってしまうからです。しかし夏休みの宣教師との伝道活動を経験して、伝道のすばらしさを知ってからは考えが変わりました。教会には多くの友達がいるから行くのではなく、伝道をすればまたもっと多くの青少年の友達と一緒に活動ができるようになるようになりました。

これからも市原支部の伝道活動に参加したいし、今まではただ19歳になったら伝道と思っていたけれども、今では、はっきりと宣教師になって必ず伝道に行き、多くの人にこの教会の福音を宣べ伝えたいと思うようになりました。この伝道というプログラムが神様から与えられたプログラムであり、重要なものであることを証します。ほんとうに今回の伝道活動に参加できてよかったと思います。(あおやぎ・あきひろ 高校2年生)

私の望み

東京東ステーキ部
市原支部

鈴木佳代子



私にとってのもうひとつの誕生日、バプテスマの日は涙があふれて止められない一日でした。長老に「聖霊だよ」と言われても実感がありません。ただ、身も心もさっぱりしたよう

な感じがしたことは覚えています。

私がバプテスマを受けてから、早くも4カ月がたちました。長年教会にいらっしやる方にとっては、ほんの短い期間に感じられるかもしれませんが、私にとってこの4カ月間は充実した、そして意義のある日々になりました。

まず、友達として巡り会えた宣教師により私にとって未知だったものが一つ一つ、真実のものとしてわかってきたことです。何度か宣教師と会っているうち、ある日私は疑問に思ったことを聞いてみました。キリスト教の教会がなぜいろいろな種類があるのかということです。何も知らない自分を表に出すのは勇気のいることでしたが、そんな心配を吹き飛ばすかのように宣教師は、丁寧に教えてくださいました。それから、もっと話が聞きたい、知りたいという気持ちが募っていきました。

私は、彼らを通して、純粋な愛、その強さ、正しさ、やさしさを知りました。それは確実に利益を求めない与える愛でした。私は、今少しこの与える愛の喜びを感じています。

私は、縁がありクラシックバレエを通して子供たちと接しています。ある生徒から「バレエの先生みたいになりたい」と言われた時の喜びが忘れられません。

「幼な子のようにになりなさい」とイエスは言われています。

私たちは神様の子供です。子供は親のようになりたくて願うのが自然です。

私は天のお父様に喜んでもらいたいです。それには、日々私自身がすべてのものに愛を持ち、できることを、義を持って行なわなければならないことを知りました。

完全という点から見れば、ちりひとつより小さい私ですが、大きなそして強い愛を持ち続けることが私の望みです。

この世で巡り会えた宣教師、模範となり励ましてくださる教会のかたがた、家族に感謝しています。そして、私たち一人一人の罪を贖ってくださったイエス・キリストの愛を知ることができた喜びをひとりでも多くの人と分かち合いたいと思っています。それがもうひとつの私の願いです。(すずき・かよこ 支部初等協会書記)

霊的なおみやげで胸いっぱいにして

東京北ステーク部「伝道ウイーク」プログラム

東京北ステーク部川越ワード部
水野裕夫

東京北ステーク部では、伝道のスピリットを高め、資格ある若人が伝道に進んで出る決心をするのを助けるため、過去10数年間、毎年8月に1週間「伝道ウイーク」というプログラムを実施してきました。

これは東京北伝道部の協力の下に、ステーク部内の若人が「伝道ウイーク」の期間中、特別宣教師に召され専任宣教師とともに生活をし、伝道を実際に経験するプログラムです。

過去東京北ステーク部より召された多くの専任宣教師は、この「伝道ウイーク」で得た霊的経験によって伝道に出る決心をしています。

ステーク部長会の指導の下に、ステーク部伝道部長会がこのプログラムを推進します。綿密な計画の下に参加したすべての兄弟姉妹が「伝道ウイーク」に向けて自分を訓練し、準備していけるよう配慮されています。

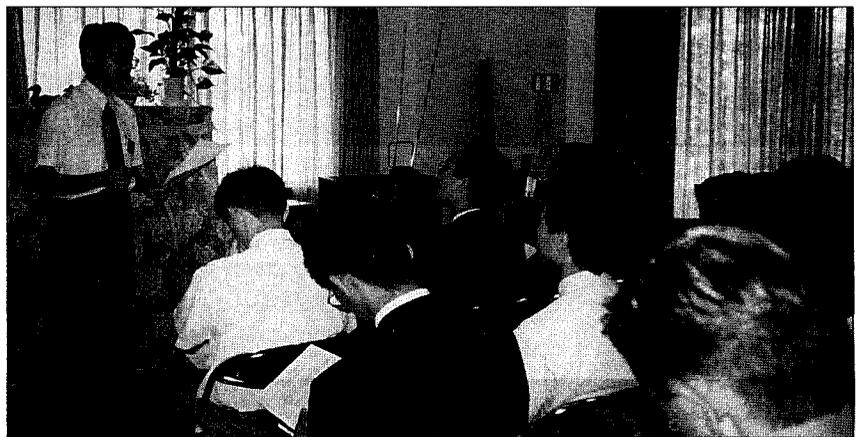
毎年1月から2月には、各ワード部の有資格者のリストアップがなされ、それ以後毎月彼らに対し、伝道に対するスピリットを高めるプログラムが計画されています。

4月ごろ、ワード部監督によって有資格者への励ましの面接。監督の面接が全員終わったころ、ステーク部伝道部長会が各ワード部を訪問、有資格者と個別に会い、必要な助けと励ましを与え「伝道ウイーク」への参加を奨励します。

6月には、ステーク部主催で伝道に関心のあるすべての人々を対象にしたファイヤサイド「アンモンの塾」が開かれます。ここでは帰還宣教師の証、過去の「伝道ウイーク」参加者の証、伝道のスピリットを高める音楽プログラム、参加者グループによるディス



8月14日から1週間にわたって行なわれた「伝道ウイーク」プログラム（上）
ミニMTCで熱心に学ぶ特別宣教師たち（下）



カッションなど、伝道の大切さ、すばらしさがアピールされます。

7月になると、ステーク部伝道部長会は、各ワード部の聖餐会に招待され過去の「伝道ウイーク」の成功例、霊的経験、喜びなどを証します。

そして7月下旬、参加希望者は、監督との面接によって推薦されます。監督の推薦状は、東京北伝道部伝道部長に渡され任地が決められます。ステーク部伝道部長会からは7月末から8月上旬に、直接各参加希望者に対して、宣教師としての霊的準備や心構えなどのアドバイスを記した文書が送られます。

「伝道ウイーク」スタートの1週間前、各個人にあて、任地の連絡がなさ

れます。ワード部によっては、この日参加者全員とその両親を招待し、ワード部特別伝道ファイヤサイドが開かれ、監督より任地を知らせる所もあります。

昨年の「伝道ウイーク」は8月14日から21日までの1週間でした。伝道期間は各個人の都合により本人の希望で決めることができます。そして、既婚者を含む過去最高の40人の参加がありました。

「伝道ウイーク」初日の8月14日曜日は全員が伝道本部に集まり、特別宣教師としての接手を受け、聖餐会を含むミニMTC（宣教師訓練センター）が開設されました。ここでは東京北伝道部長会、ステーク部長会、ス

テーキ部伝道部長会の出席の下に伝道に必要なトレーニングがなされました。

この日すべての訓練を終え、デビッド・O・マッケイ大管長の言われた言葉「この人とはもう二度と会えないという心意気で接し、心に感じたことを率直に礼儀をもって話しなさい。あなたしか感動させることのできない人に今あなたは会っているかもしれない」を胸に、力強い証とともに任地にたって行きました。

猛暑の中、慣れない街頭伝道で緊張し、必死に自転車をこぎ、初めて教えるレッスンでみたまに感動し涙を流して証をし、この世のすべての業から離れ主のみ業に携わる喜びを胸に、8月21日無事に「伝道ウイーク」が終了しました。

8月の最終日曜日、各ワード部の指導者や「伝道ウイーク」参加者全員がステーキ部センターに再び集合し証会が開かれました。

教会員の両親の下で生まれ育ったひとりの兄弟は、「長い間、みたまを感じることができず、ほんとうにみたまとともにある生活をしてみたかった。『伝道ウイーク』の間、主は確かに生きておられ、みたまが自分にもささやきかけてくれたことを感ずることができた」と涙を流し証していました。

また別の兄弟は、「18年間生きてきてこんなに幸せな日々を感じたことはなかった。祈ること、証をすること、主の戒めを伝えるとき、これがこの世にきた目的だと感じた」と話していました。

既婚者で参加した姉妹は、「バプテスマを受けて13年間、4、5年前から霊性が落ち苦しんでいた。そんな時、主人から子供をみているから『伝道ウイーク』に参加してみないかと勧められ、びっくりしたがやってみようと決心。3日間だけだったが、暑い中、体は疲れるが、心はいつも温かく、歩いている時も胸が熱くなり何度も泣きそうになった。こんな自分でも主に愛されていると感じた。子供たちに『伝道ウイーク』で得た証を時間をかけて伝えていきたい」と話していました。

この「伝道ウイーク」で得た証はそれぞれ皆違っていますが、全員が伝道

地からの霊的なおみやげで胸いっぱいにして帰って来ました。

各任地で温かく迎えてくださった兄弟姉妹、寝食をともにし模範を示してくださった宣教師のかたがた、よき励ましと指導をしてくださった各ワード部の指導者のかたがた、そのほか携わってくださったすべての兄弟姉妹に心より感謝申し上げます。(みずの・ひろお 伝道担当高等評議員)

神様の力

東京北ステーキ部
浦和ワード部

宮城美恵



「千葉ワード部」それは私が今回召された伝道地でした。「伝道ウイーク」を終えた今では、私の特別な地域です。最初聞いた時は、どんな所だろう、どんな宣教師がいるのだろうと、期待と不安でいっぱいでした。神権者によって宣教師にあんしゅにんめい按手任命された時、特別な気持ちを感じました。必ず道が備えられていると確信できたのです。笑顔を忘れない伝道にしようと決心しました。励めと励ましをくださった神様に感謝しています。

「伝道ウイーク」で、私は福音に興味がある方に宣教師としてお話しする機会がありました。フィリピン人の女性で、日本人のご主人と3歳の息子さんがいらっしゃいます。彼女はイエス・キリストの絵を見て「これがほんとうにイエス・キリストの絵なのかどうか信じられない」と言いました。本人に会ったこともない人がどうして描けるのかと疑問に思ったのでしょうか。

同僚は一生懸命に証あかしをしました。ふたりは英語で話をしていたので、私は祈ることしかできません。少し不安でしたが、同僚の証がとってもよかったせいか、その場がよい雰囲気になっていきました。神様がそばにいるような不思議な気持ちでした。

最後に、彼女はバプテスマを受ける決心をしました。彼女の心が変わったのです。祈りはほんとうにこたえられるものだ実感しました。神様は私たちの祈りを聞いて助けてくださったのです。また、同僚が証する姿を見て、「全く純粋な証詞あかしを以てこれ責めるよりほかに民を改心させる道がない」(アルマ4:19)という意味が少しわかったような気がします。

2日間という短い伝道でしたが、神様は人の心を変えることができるとわかりました。また「伝道はすばらしい」と証していた帰還宣教師の気持ち、わかったような気がします。人々が幸せを感じる瞬間は最高です。「伝道ウイーク」に参加することができて感謝しています。(みやぎ・よしえ ステーキ部宣教師)

伝道は喜びです

東京北ステーキ部浦和ワード部
高橋あゆみ

私は今年、初めて「伝道ウイーク」に参加しました。1週間でしたが、毎日が貴重な体験で、福音への理解がまた少し深まりました。

同僚と戸別訪問をしていた時、年輩の人々がしきりに「私はもう先が長くないから、今さら人生の目的なんて聞



「伝道ウイーク」での高橋あゆみ姉妹 (写真左)

役員の異動

1994年11月8日から11月28日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の異動（敬称略）

- 札幌ステークキ部千歳恵庭支部
新支部長：村中俊一
（前任者：菅原英二）
- 札幌伝道部釧路地方部釧路支部
新支部長：新田修
（前任者：平岩範夫）
- 名古屋伝道部福井地方部福井第1支部
新支部長：吉田達弥
（前任者：渡辺健）
- 大阪ステークキ部阿倍野ワード部
新監督：坂本正樹
（前任者：小村明）
- 岡山伝道部松山地方部高知支部
新支部長：原健
（前任者：刈谷真爾）
- 福岡伝道部鹿児島地方部宮崎支部
新支部長：黒木三千夫
（前任者：Dennis Curt Petersen）

●おわびと訂正

1994年12月号ローカル11ページで、大阪東ステークキ部が神戸伝道部の担当地区内にありましたが、これは大阪伝道部の誤りです。おわびして訂正いたします。

*12月は日本人宣教師訓練センター（JMTC）が開かれなかったため、新しく召された宣教師の紹介はありません。

みたまに心を 満たされ

東京北ステークキ部
川越ワード部

水野薫



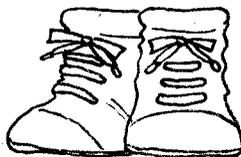
伝道中の兄から送られてきた手紙を読むたびに、私は、伝道について考えていました。私も伝道に出るべきかどうか悩んでいたのです。6月ごろに来た兄からの手紙の中に「『伝道ウイーク』に参加するように」というメッセージが書いてあり、自分自身でよく祈り、考えてから、やはり行こうと思ひ、今回の「伝道ウイーク」に参加しました。

私が参加した期間は5日間だけでしたが、この5日間は私にとって、とても貴重な経験でした。たった5日間でしたが、この5日間で、伝道の業は、ほんとうにすばらしい主の偉大なみ業であることを知りました。

伝道は、初めての経験だったので、慣れないことが多く、体はとっても疲れていましたが、いつもみたまが私の心を満たしてくれていたため、私はどんなに疲れていても、やる気いっぱいでした。

伝道中の私は、まるで別人のようでした。伝道を通して、私の信仰はさらに強められ、私と神様のきずながさらに深まったように思います。

今私は、短い間でしたが、主のみ業に携われたことに心から感謝しています。（みずの・かおり ワード部初等協会教師）



かなくてもいいよ」と言うのを聞きました。もう少ししか人生がないのだから、もういいと思っているのでしょうか。やはり、死はすべての終わりだと思っているのでしょうか。しかし私には「人がもし死ねば、また生きるでしょうか」（ヨブ14:14）との問いに答えられるほどの強い証はありませんでした。

「人は死んでもまた生きる」という強い証を得たくて、聖典や「聖徒の道」を祈り求めながら読んでいた時、指導者が引用したある手紙が目にとまりました。私はその手紙を書いた兄弟の信仰に感動し、毎日何度も読み返しました。その手紙は、自分の死を予感し戦場から愛する妻へあてて書かれたものです。「……私の死を悲しまないてください。私は行ってあなたを待っていると思ってください。もう一度会えるからです。」（トーマス・S・モンソン『平和への道』『聖徒の道』1994年7月号、p.65）

ほんとうにもう一度会えるのでしょうか。私は彼の深い信仰に励まされ、「もう一度会えないなら、私がもう一度生きられないなら、私の存在は無に等しい。そんなことがあるはずはない」という信仰を持って、強く神様に祈り求めました。そしてその時、神様は私の祈りにこたえてくださったのです。私は心から、死は決して終わりではなく、人はまた必ず生きて愛する人々とともに永遠に住むことができること、そしてこの喜びの道を天父とイエス・キリストが備えてくださったことを知りました。天父の深い愛を感じ、イエス・キリストの贖いの意味が、また少し理解できました。

この証を得てから、私はもっと伝道をしたが、人々にこの喜びの福音を知ってもらいたいと以前より強く思うようになりました。伝道は喜びです。一緒に働いた4人の同僚に心からの愛と感謝を述べたいと思います。私は天父とイエス・キリストを心から愛する気持ちでいっぱいです。私をほんとうの幸福へと導いてくれた大切な福音を、これからも大切な人々と分かち合っていきたいと思います。（たかはし・あゆみ ステークキ部若い女性書記）